

# 加藤秀俊のタフネス性と先見性 —中井正一のメディアウム・ミッテル概念を用いた考察—

松井勇起\*, 後藤嘉宏\*\*

## Toughness and Foresight of Hidetoshi Kato: A Study Using Masakazu Nakai's Concepts of Medium and Mittel

MATSUI Yuuki, GOTO Yoshihiro

### 抄録

加藤秀俊はデイビッド・リースマン『孤独な群衆』での概念である「他人指向型」を指向し、複雑な事象である社会を相手に相互媒介的で学習科学的なコミュニケーションを理想とした。ただし、そのためには認知資源上の限界が存在し、認知的不協和のような事態にもなりうるため、加藤のスタンスは極めて知的な負荷の高い、タフネスさを要求するものである。

認知資源論とフェスティンガーの認知的不協和理論に連なる先行研究として、最初に認知論、媒介論、コミュニケーション論などを整理する。その上で、中井正一のメディアウム・ミッテル論と諫官論を検討することで、加藤の戦後メディア史上で果たした機能を分析するための評価軸を作る。考察の結果、受け入れがたい事象であっても果敢に提示する強い心を持ち、長期的でマクロな、換言すればシステム思考的な視点を持つ先見者であると加藤は評価可能であることがわかる。ここから、およそバブル期までの間の戦後メディア史における加藤の機能は、具体的な事象を多数観察し、大量に記述し、そして余すところなく現実をマクロ的に描ききることで、先見者として戦後日本のリアルな姿を示すことであったといえる。さらにそのことによる鋭い論点の発見によって、それを受け入れる器のない知識人、認知資源の余裕のない者の嫌悪を買うことが加藤にはあった、とまとめることができる。

### Abstract

Hidetoshi Kato was oriented toward the “other-oriented” concept of David Riesman’s “The Lonely Crowd,” and idealized inter-mediated communication with complicated society, which is suitable for learning sciences. Kato’s stance, however, requires intellectual toughness because of the limitations of cognitive resources and the potential for cognitive dissonance.

We will first summarize cognitive theory, mediation theory, and communication theory as prior research linked to cognitive resource theory and Festinger’s cognitive dissonance theory. Then, by examining Masakazu Nakai’s concepts of medium and mittel and his concept of imperial censors, “kankan (諫官)” in Japanese, we will create evaluation items to analyze Kato’s function in postwar media history. As a result, we can evaluate Kato as a seer who boldly presents even unacceptable events and has a long-term, macroscopic, or in other words, system thinking. From this, we can summarize that Kato’s function in postwar media history as Bubble era was showing the real picture of postwar Japan as a seer to observe and describe a large number of concrete events, and to be good at depicting reality in a macroscopic way without leaving anything out. Furthermore, it can be summarized that by discovering sharp points of view, Kato was able to arouse the disgust of intellectuals who did not have the capacity to accept them and those who did not have the luxury of cognitive resources.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies  
University of Tsukuba

\*\* 筑波大学図書館情報メディア系  
Faculty of Library, Information and Media Science  
University of Tsukuba

## 1. はじめに

### 1.1 問題の背景 加藤秀俊の学習科学的姿勢

社会学者加藤秀俊はアメリカでデイビッド・リースマンに師事し、後に『孤独な群衆』の新訳<sup>1</sup>を行っているなど、リースマンの考え方を深く身につけた人物の一人である。そのような中で、高度経済成長期に入る前の段階から『孤独な群衆』での他人指向型を高く評価していた。以下の『孤独な群衆』での他人指向型に関する議論は既に松井（2020c）にあるが、重要なので概要を示す。

リースマンは指向型を伝統指向型、内部指向型、他人指向型の三つの類型に分けて人間の行為パターンとしている（リースマン（1961=2013））。この三つは概ね時代の変化に合わせて比率が変動してきたものと捉えている。伝統指向型とは伝統や慣習に基づいて行動するタイプの人間であり、前近代社会に適応的である。内部指向型とは自分自身に埋め込まれたある信念に対して忠実に行動するタイプの人間であり、18世紀後半から20世紀前半、特に第一次世界大戦期より始まる総力戦体制までのいわゆる前期近代の社会<sup>2</sup>に適応的であり、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で描いているような、勤勉でストイックな行動パターンである。他人指向型とは、他者の行動をよく観察した上で他者の行動に合わせるという、総力戦体制が構築された後の現代社会に適応的な人間のことである。

リースマンは内部指向型をジャイロスコープ、他人指向型をレーダーに譬えてその良し悪し両面を論じており、リースマンを誤読している人も含めた多くの論者と異なり、他人指向型を主体性の欠けた存在であるというマイナスの評価を下しているわけではない<sup>3</sup>。加藤もリースマンと同じ見方を共有している。他人指向型の良いところとして柔軟性に富んで他者と協調しやすいことが挙げられ、その上で加藤は自由なコミュニケーションを行い、サークルなどの共同体を形成し自己実現を進んで行いやすいことを指摘している（橋川ほか 1958）。また、内部指向型の弱点は他者の意見や立場に対して排他的になりがちなことや、個人をアトム化させ社会とのつながりを破壊してしまう要素があることであり、後期近代のアノミー化が進展している世の中からすれば、社会の再結合を促しうる他人指向型の優れた点<sup>4</sup>は理に適っていると評価できる。以上がリースマンと加藤の他人指向型に関する議論の概略である。

他人指向型の、このような自主的なコミュニケーションによるサークルの形成は、いわゆる学習科学や経験学習（松尾（2011））と呼ばれる考え方に親和的である。

また学習科学的・経験学習的な姿勢は、本稿の鍵となる概念である、認知資源と認知的不協和理論とに密接にかかわる。したがってやや長くなるが、以下に経験学習論及び学習科学論についての説明をする。なお、教育学分野での学習科学論と経営学で扱われる経験学習論は共に実務的な視点を持ち、教師による上からただ一方的に与えられる教育ではなく自らが主体的に学んで試行錯誤することを重視する点で共通の基盤を持つ。両者の違いは、前者は図書館情報学なども含む生涯学習論を中心に教育学的文脈で使われるものであるのに対して、後者は経営学での組織内学習で使われるものであるという点にある<sup>5</sup>。以下、本稿では教育学あるいは経営学どちらかの立場に立つわけではないので、両者が認知資源・認知的不協和の話に帰着させうる限りにおいて同等の機能を果たすものとして、並列的に扱う。

松尾の経験学習論は、組織内での経験を内省し振り返ることで古い硬直した考えをアンラーニングし、他者の視点を加えつつも自分の感情や目標を再確認していくことを続けるというものであるが、経営学では松尾以前から、野中郁次郎及び竹内弘高<sup>6</sup>やピーター・M・センゲらが、マイケル・ポーターに代表されるポジショニングよりも組織内での経験学習によって人材が成長するケイパビリティ論を重視する考えを主張している（ミンツバークほか（2008=2012））。野中・竹内のSECIプロセス論<sup>7</sup>（1995=1996）はマイケル・ポランニーの暗黙知論（ポランニー 1966=2003）を用いて、暗黙知と形式知を相互に変換させる一連のスパイラル的な流れを経営学の中に位置づけたものであり、共同化、表出化、結合化、内面化を繰り返していくものであるというモデルである。センゲによる『学習する組織』（2006=2011）では、共有地の悲劇に代表されるマイクロ・マクロの社会的ジレンマ構造<sup>8</sup>となるような、マイクロの合理性の追求がマクロの最適化とバッティングするようなメカニズムを見破るために、社会システムのループ状となっている仕組みを強く認識するシステム思考の考えを導入する。そして、組織内での学習を通じて組織全体や組織に属する個々の当初の考え方の癖や偏見であるメンタルモデルをまずは自覚し、変化・改善していくことを目指し、チーム内での対話を通じて社員同士の学習を促していくというものである。松尾、野中・竹内、センゲらのスタイルは現代経営学では組織学習論として編成（安藤（2019））されているが、マイクロ・マクロ間で事象と法則とが異なりつつも両者が相互に連動しているという大まかな特徴がある。

以上のような経験学習・組織学習論は加藤の議論と親

和的である。まずその背景として、知識論が古くはピーター・ドラッカーやアルビン・トフラーなどが産業社会論（稲葉（2018））と呼ばれる分野を論じる際に知識が産業社会の中で重要であることを示すことで発生した点が挙げられる。この知識論はトフラーやダニエル・ベル、梅棹忠夫らが唱えた情報社会論<sup>9</sup>と連続的であり、コンピューター社会と情報量の増大という現象を説明していた。梅棹は加藤の京都大学人文科学研究所での先輩であり、情報社会化について最初期に論じた（加藤 1963）一人でもある。

また、加藤の発想は経験学習的なものである。加藤は大学教員として学生を教育しつつも、上からの教育だけではない、学生側の自主行動である学習を重視する議論<sup>10</sup>（学習科学論）を『独学のすすめ』で展開している（加藤 1975=2009）。また、加藤は図書館の使い方や調べものの方法といった図書館サービス・情報サービスの活用法も『取材学』で詳しく言及（加藤 1975）しており、加藤の学習科学論は机上の空論ではなく実際の経験とテクニックとが合わさったものになっていると評価ができる。

## 1.2 加藤秀俊の方法論

加藤の学習科学・経験学習的な姿勢は著述の中でもよく表れている。加藤の文章は淡々と具体的な経験・事実を丁寧に記述することに終始することが多く、その際にその事例を何かの理論に当てはまる、といった形の説明をすることは少ない。その上で扱う経験や事例は数多く、様々なエピソードがちりばめられていっている。通常、そうした書き方は事実の羅列になるだけになりがちであるが、加藤はミクロな事象を集めた記述全体によってマクロな社会とは何なのかが浮かび上がるような工夫を施している。この書き方は柳田国男の民俗学と同様の手法であり、柳田の『明治大正史 世相篇』（2001）では加藤自らが解説を書いてこのことを触れている。つまり、柳田が開発したミクロな記述を集めて適切に配列することでマクロな社会を描く手法を加藤は学び、社会学に応用したこととなる。野中やセンゲなどが言うようにミクロの観察とマクロな分析は両者は質的に異なるものだが、両者を繋げることができるという点で、ここでも加藤は一貫している。具体的にはどのような方法で結びつけているのだろうか。

筒井清忠編『日本の歴史社会学』（1999）は日本人の歴史社会学的な文献を著作ごとにとりあげて解説している本であるが、その中で佐藤哲彦は加藤秀俊『世相史』（1981）を挙げている。佐藤は加藤の文章を「彼の作品

の最大の魅力は、実はその文章の平易さと明晰さにある。そのような彼の著作を要約し紹介することは、精神的には極めて「しんどい」作業だった。いってみれば、秋刀魚の骨を見てそれを美味しくさうだと思えというような無理難題に近い。彼の文章の魅力が、この拙い紹介では全く伝え切れていない—せいぜいそれが本当に秋刀魚なのだということ程度しか伝えられていない—ことを悔やむばかりである」（佐藤1999：315）と表現している。本稿で触れる柳田民俗学的方法を佐藤も「方法なき方法」と名付け、加藤がフィールドワークで得た経験やデータの集合体が社会学理論のような一般性に通じていることを論じている。

加藤自身『明治大正史 世相篇』の解説で「その結果、この書物のなかには新聞記事からの引用や言及はきわめてすくなく、そのかわりに柳田がみずからの鋭敏な観察にもとづいて同時代に巨視的な傾向線をひくことによって「世相」をみるという手法がとられたのであった」と書いており、加藤自身方法論に自覚的でありながら各論考を執筆していたことが分かる。加藤にとって社会全体という巨大な対象を、自分が観察できる範囲のミクロな経験の積み重ねで説明することは、「巨視的な傾向線」（=マクロ）という方法によってできるものであると考えられている。要は、ミクロの事象の中からマクロな法則を説明できる要素を見つけて結びつけることで両者のギャップを埋めることである。加藤は、柳田がミクロ面では中部山岳地帯で米、塩、魚などの荷物を運搬するボツカの姿を精密に描きながら、マクロとしては風来坊の日本社会での役割を見事に説明していると讃えている。加藤が採用した柳田の方法論とは、具体的な事実から抽象的な理論へと橋渡しをするという点で帰納法やアブダクションの手法<sup>11</sup>と通じるものであるが、自らが経験し考えることを重視する学習科学・経験学習的な姿勢でもある。

## 1.3 加藤秀俊に関する先行研究

加藤に関する先行研究としては、竹内洋の加藤秀俊論（竹内 2014）と松井勇起の論文（松井 2020c）が加藤本人を主題としたものとしてある。また、加藤が現在も学術顧問を務める中部大学が編纂している雑誌『ARENA』の2011年に発行した第12号に「加藤秀俊をめぐる環」という特集がある。最初に挙げた竹内洋の論考はこの加藤の特集を加筆修正したものである。さらに、同じくこの特集に参加した佐藤卓己は自分の研究室である京都大学大学院メディア文化論研究室の機関誌を『京都メディア史研究年報』と題して発行しているが、第二号では加藤について京都大学時代の加藤のマス・コミュニケーション

ン論講座の様子を描いた津金澤聰廣や、加藤本人も参加した加藤秀俊著『メディアの展開』の内容に関するワークショップ（佐藤卓己が主宰する京都大学大学院メディア文化論研究室の主催）を報告する松永智子の記事も載っている。しかし、以上の研究では加藤の学習科学的側面について触れられているわけではない。学習科学や経験学習との親和性の話は、後述する主題的トピックである認知資源・認知的不協和論や諫官論、先見者論と繋がるテーマであり、これらを総合して扱う点で本研究には新規性がある。

#### 1.4 コミュニケーションに不可欠なタフネスさ 認知資源

加藤の『独学のすすめ』や『取材学』に代表される学習科学・経験学習的な姿勢は、現代でも十分通用しうる議論である<sup>12</sup>。ただし、これを実行することはじつは容易ではないことをいったん考えなければならない。それは、認知心理学でなされる認知資源と認知的不協和理論である。

認知資源とは、その文字の通り、認知行為を行う際の精神的負担をどこまで脳が担いするかを資源として考える見方（箱田 2010:166）である。集中力や注意力といったものは、認知資源を消費する。高い集中力を要求される仕事を長時間行って疲れ果てているときに、勉強をする余裕がなかったり、階段から足を踏み外してしまったりやすくなったりすることも、脳の認知資源を使い果たしてしまったからである、と説明できる。

認知的不協和理論とは、社会心理学者であるレオン・フェスティンガー<sup>13</sup>が提示（1957=1965）したものである。認知が矛盾を起している状態は強く認知資源を消費するため、ストレスを感じてその認知を解消することを促しやすくする、というものである。例えば、1「喫煙をしたい」が2「喫煙することは体に悪いことである」と知っている場合、自分のしたいことが自分の悪影響を及ぼすと脳が判断しその矛盾から不快感が発生する。そのため、1を変更し3「禁煙をし」だすか、2を4「喫煙による害はたいしたことがない、嘘である」といった形で変更する誘因が発生する、というものである。タバコはニコチンによる中毒性があるため、1を3に変更するよりは2を4に変更しやすい、すなわち楽な方に流されがちである人間心理をうまく説明したものになっている。

加藤の学習科学・経験学習的な姿勢は新しく人間関係を形成しサークルを成立させたり、自学自習することで新たな知識を学び経験をしたり、ということをして

考え方であり、これは後述する中井正一の組織論・コミュニケーション論である「委員会の論理」（1936）と似たものである。当然、他者との交流や新しい知識や経験は今までの自分の考え方に合わないものや、説明できないものとの接触が増えることになる。その中には認知資源を多大に消費し、認知的不協和を引き起こすものも当然存在することになる。このときに学習で認知資源を大量に消費することで疲労が発生しそれ以上学習することを放棄したり、認知的不協和によって現実を受け止めずに無視して誤った認知へと飛びついたりする、ということ人間は行いがちである。加藤の健全な提言は、じつは認知資源を大いに消費させるハードワークに外ならず、人間にとって難易度の高い行為<sup>14</sup>でもある。野中・竹内やセンゲらの組織学習論が長く世界中で受け入れられているにもかかわらず、企業内トラブルが絶えないことも、こうした学習科学的行為は強靱な精神や十分で余裕ある認知資源、認知的不協和に負けない豊かな教養や経験値が必要であり、多くの人間には困難であることの傍証にもなっているといえよう。

本論では、中井正一のメディウム・ミッテル概念と加藤を繋ぐことで、中井と加藤の新たな側面を見出すことを目指す。その際に、上記で紹介した論点、特に認知資源論・認知的不協和理論の考え方を扱うことで両者の連続性を指摘しつつ、中井の諫官論から加藤の社会に果たした機能として、他者に認知的不協和を起こさせる現実を帰納法やアブダクションによって見出した上で他者に突き付け学習を促す、「先見者」としての性質を提示しまとめることで、戦後メディア知識人の中での加藤という存在について考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1 一般的な認知論・媒介論の先行研究

加藤についての先行研究はすでに前章で触れているので、その他の切り口についての先行研究を本章で述べる。認知資源論・認知的不協和理論の前史である、認知論、媒介論は学問上で何度も取り上げられてきた重要なテーマである。これらのテーマは中井を論じる際に必要な観点であり、思想史を踏まえて最小限の範囲で整理する。さらに、次節では中井と加藤どちらも関係するコミュニケーション論について、認知論や媒介論と関連する部分を中心に整理する。

特に中井と加藤は共に思想の科学研究会の創設から比較的日の浅い段階から同研究会に加わったという点で、共通項を有する。しかも雑誌『思想の科学』は1947年

10月から、戦前建国大学で「新聞政策」「弘報論」を教えていた井口一郎を編集長に迎え、編集長井口の意向もあって、雑誌がコミュニケーション論、マス・コミュニケーション論に深く関与してきたことは、田村紀雄の論じるところでもある。井口はこの雑誌で日本では真新しかったアメリカのコミュニケーション学の紹介に務め、加藤の指導教員となる南博ら新進気鋭の専門家に寄稿させると同時に、自らも同誌掲載の「コミュニケーション序説—ラスウェルの方法論について」等で、アメリカの最新の学説を紹介したと田村はいう。井口についての論考の末尾の方では次のように田村は記す。「一連の思想の科学研究会会員の言説をよんでいると、井口によってもたらされた、コミュニケーションの用語、概念がまず思想の科学研究会のメンバーにつよい衝撃だったことがわかる」（田村 2012：132）。実際、編集長を辞してからの著書であるが、井口の『マス・コミュニケーション』（1951）は、元東大新聞研究所所長の竹内郁郎が学会の回顧・展望の論文において、『マス・コミュニケーション』という名を最初に冠した単行本」（竹内 1998：5）と評していて、またこの井口の著作に対して「これは本当に衝撃的な本でした」（内山・有山・乾 2003：159）と証言する、やはり東大新聞研究所元所長の内川芳美は、井口をはじめとする思想の科学研究会の関係者が、コミュニケーション、マス・コミュニケーションという用語を使い始めたことにも当時強い印象を受けたと語っていて、その意味でも田村の上述の発言は裏づけられる。

さて、認知論と媒介論の関係に戻るが、認知論は心理学で取り上げられる以前では認識論<sup>15</sup>という、存在論と並ぶ哲学上の大きなテーマであった。認識論は中世キリスト教神学を経て、ルネ・デカルトの大陸合理論とフランス・ベーコンによるイギリス経験論に発展したが、エマニュエル・カントの『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』により両者は統合され、物自体という対象からではなく主観の先天的な形式から認識が始まるという「コペルニクス的転回」を主張した。その後、ヘーゲルやマルクス主義、実存主義を経て分析哲学の立場が認識そのもののメカニズムを、論理学などを用いて解説していく立場を明確にし、現代米英認識論<sup>16</sup>に接続していく。

また、イギリス経験論の立場から、感覚や観念の連合によって複雑な観念が形成されるという考え、すなわち連合心理学と呼ばれる立場が発生した。連合心理学は、哲学と心理学がまだ未分化だった時代の過渡期的<sup>17</sup>なものとされている。心理学がヴィルヘルム・ヴントやウィリアム・ジェームズの頃に心理学実験室が設置されて哲

学から分離<sup>18</sup>するようになると、認知の在り方が心理学的な形で探求されるようになり、ゲシュタルト心理学を経て行動主義の刺激-反応（S-R）モデルや新行動主義の（S-O-R）図式に認知への関心をつなげる形で、ウルリック・ナイサーが1967年に『認知心理学』と題した本を出すことで、情報処理モデルをベースとする現在の認知心理学へと発展していった（大芦 2016）。

こうした認知心理学的な考えを哲学や科学史的な伝統のもとで行ってきた、フランスのエピステモロジーと呼ばれる思想もある（金森 1996）。例えば、ガストン・バシュラールは正しく科学的思考を行う際に必要な認識論的切断という概念を導出している。認識論的切断はバシュラールの弟子であるジョルジュ・カンギレムを介してミシェル・フーコーやピエール・ブルデューなどに影響し、人間の認知が立場や思想などで様々なバイアスにまみれて歪む<sup>19</sup>という説明の要素となっている（磯 2020）。

媒介論は、すでに中世では神と人との間（メディアム）を媒介するという形の議論がなされており、ヘーゲルはこれを全ての存在・認知といった事物が他の事物との関係性によって成立しているものとして媒介論を再定式化した。以来、ドイツ観念論やその影響を受けたマルクス主義において媒介論は重要なテーマとなっており、両者の影響を受けた日本でも媒介論は盛んに論じられることとなった。

## 2.2 関連するコミュニケーション論的トピック

コミュニケーション論は当初はマス・コミュニケーション論や新聞学、プロパガンダ論やメディア論と混在しながら発展してきた。弾丸理論と呼ばれる、マスメディアが一方向的に視聴者側である大衆に対して影響力を与えるというタイプの議論は行動主義心理学者が始めているが、その前史としてギュスターブ・ル・ボンの『群衆心理』がすでに存在している。弾丸理論はカッツとラザースフェルドによる二段階のコミュニケーションの流れ仮説による限定効果論へと否定され・乗り越えられたが、さらに近年、効果論の主流は議題設定機能仮説、培養分析や沈黙の螺旋理論などの強力効果論へとシフトするなど、メディアの効果の大きさを巡る議論は未だに、弾丸（強力効果論よりも強力な効果を想定）理論→限定効果論→強力効果論（限定効果論に比べて相対的に強力な効果を発揮していると想定）と、大いに揺れている。

また、実務としてのメディア広告やプロパガンダを生業にする立場からもメディアは論じる対象でもあった。プロパガンダという言葉は宗教改革時にローマ＝カトリックが対抗して布教をすることから生じており、時代

を下るとイデオロギーを信奉する集団がどのように政治的権力を握るかという問題意識からプロパガンダが論じられるようになった。イタリアの共産主義者であるアントニオ・グラムシ<sup>20</sup>はロシアが後進国であるにもかかわらず革命が起きたことからそれまでのマルクス主義での定説であった下部構造決定論に疑問を持ち、支配階級と被支配階級がお互い媒介し合うことで妥協する、つまり下からのある程度の支持がある支配階級という見方を示した。下からの支持を上が獲得しヘゲモニーを握るためには、知識人という、支配階級及び従属階級どちらの要素も自らに内在させ相互媒介をしやすい位置にいる存在で、さらに言説を支配しているためにその機能を果たししやすい位置にもいる存在に、大きな意味があると主張した。傑出したプロパガンディストにして知識人でもあることで独裁政治を牽引したヨーゼフ・ゲッベルスや毛沢東は認知操作と媒介の重要性を繰り返し語っており、その実践例であるといえよう。また、ジグムント・フロイトの甥であるエドワード・バーネイズは移住したアメリカにおいて世界大戦での対枢軸国プロパガンダに関与しながら、一方で民間人として企業広告であるPRを仕事としたパイオニアである(バーネイズ 1928=2010)。バーネイズが始めた企業プロモーションは資本主義の原動力として作動するものである、として繰り返し考察、論及されている<sup>21</sup>。

コミュニケーションが哲学的議論やヘゲモニー論や経済的利益を握るための政治・経済的プロパガンダと独立した形で定式化されたのは、条件付き確率の考え方をを用いたクロード・シャノンとウォーレン・ウィーバーによる通信機のモデルによってである。電気信号での送受信とそれを邪魔するノイズという工学的な考え方であり、数式によって表現できるものである。これをベースに情報の意味をどう解釈するか、という形で社会科学上のコミュニケーション理論へと輸入されていくことになった(西垣 2012)。

これらの先行研究は認知資源論や認知的不協和理論に関連している。例えば、哲学上で認識論を深く論じたデビッド・ヒュームは「理性は情動の奴隷」という形で理性の限界を表現したり、エピステモロジーの立場からは認識論の切断という形で現実を正しく認識できなくなるやりがちな思考パターンやその原因が述べられたりしている。また、優れたプロパガンダを發した毛沢東は『矛盾論』『実践論』で媒介行為による学習効果や認知への作用を論じており、認知と媒介によってどのように社会が変動するかという現象を射程に入れているといえよう。これらは認知資源の限界や認知的不協和を起こした

ときに起きがちな人間のありように注目した論として、繋がっている。

### 3. 加藤秀俊の先達としての中井正一

#### 3.1 中井正一のメディアム・ミッテル・メディアムに支えられたミッテル論

この節では、中井正一<sup>22</sup>の議論の中でもメディアムとミッテルについて整理する。その前に、中井について最小限度の説明を行ってから本題に入っていく。中井は京都帝国大学文学部哲学科で美学・美術史を学び、京都学派左派の立場から様々な評論活動を行った美学者である。戦時中に反ファシズムの人民戦線を組織したが、コミンテルンと通じていたとの誤情報を得た官憲により1937年治安維持法違反容疑で検挙され、執行猶予付きの有罪判決を受け、終戦間際まで当局の監視下に置かれた。終戦間際の1945年6月から尾道市立図書館長となり、戦後は、講座派マルクス主義者で、参議院議員・参議院図書館運営委員会委員長になっていた史学者羽仁五郎の推薦によって、1948年、国立国会図書館の初代副館長<sup>23</sup>となり、1952年に亡くなるまでのあいだ図書館行政に携わった。戦前からの言論活動や戦後の図書館行政に至るまで、さまざまな形でメディアに関与してきたと評することができる。

なお、戦前は雑誌『世界文化』(1935-37)、隔週刊新聞『土曜日』(1936-37)というメディアを中井は主宰し、瀧川事件(1933)後のファシズム的な<sup>24</sup>学問・文化への圧力の強化に抵抗する人民戦線を中井は組織化したが、『世界文化』同人には、自由主義者、マルクス主義者、キリスト教徒が加わり、合評会等では喧々諤々と議論しつつそのあとの宴席では和気藹藹と酒を酌み交わし呉越同舟的に手を取り合っていた。特にその当時の中井の後見人とも目された住谷悦治は、内村鑑三の非戦論に共鳴した著名な牧師住谷天来の甥で、キリスト教徒でありつつ労農派マルクス主義者でもあり(通常、キリストとマルクスの双方は水と油の関係とされるが)、戦後は同志社総長にもなった人物である。また同人で同志社大学予科教授の和田洋一はキリスト教徒でなおかつ内村鑑三の義理の甥でもある。なお中井自身は浄土真宗の篤信家で、自由主義者であった。このように自由主義者、マルクス主義者、キリスト教徒が論争をしつつも手を携え、人民戦線を形成しているのが、同人誌『世界文化』であり、その同人誌を事実上主宰しているのが中井であった。

その意味で、中井は認知的不協和の理論に親和的といえるか、認知的不協和に対する耐性・タフネス性を強く持

たざるを得ない経歴を辿ってきた人物である。多様な思想を中井自身が背景に持ちつつ、また中井の周囲も様々な思想を持っている人物が揃っている環境であり、その上で思想の違いを認識し意見を戦わせつつも、なんとか反ファシズムという一つの方向での協働行為を行ってきたということは、中井が他者との交流や新しい知識を学習することで認知資源を大量に消費させてきたであろうことを示しているからである。また、戦後の国立国会図書館においては、戦前の治安維持法違反での逮捕歴や講座派の羽仁議員の推薦ということもあり、「アカ」の副館長を排斥しようというビラ攻撃にも見舞われてきた。その点でも彼の言論活動の着想には、異論に耐えるという寛容の精神<sup>25</sup>が強く背景にある。

中井は戦前から戦後にかけて様々な分野の論考を執筆した人物であるが、中井を貫く問題意識の一つとして、媒介論がある。中井が媒介について論じる際に、同じ媒介を意味する単語でもメディアウムとミッテルという二つの用語を使い分けている。メディアウムとミッテルがどういう意味か、またメディアウムとミッテルに対してどういう評価を中井がしているかは時期や論考によってズレがあり、統一した中井の立場があるとはいいい難いが、およそについては後藤（2005, 2016, 2019）がまとめているので、この整理をもとに認知資源論や認知的不協和理論との接続を目指す。

中井はメディアウムとミッテルをモノとコト、すなわち静的・動的という二項対立で表現している。メディアウムをただ単にあるものとあるものとの間・中間だけでしかないという意味での媒介の意味であるとし、ミッテルはあるものとあるものとの媒介する行為としての媒介の意味を持つとした。メディアウムの具体例は本や知識人、知識といった中間に存在するものであり、一方向的、あるいは動きの少ないものである。他方、ミッテルは相互交流的で双方向的性である。以上の対比を前提とした上で、認知資源が多く、自己の主張を場合によって控えながら集団の主張、集団の主体を育む実践を人民戦線においても国立国会図書館においても果たしてきた中井は、相互交流や実践を重んじるだけに、メディアウムよりもミッテルをより大事なものとみなし、メディアウムからミッテルへ、という大まかな志向性を持っている。以上の整理を後藤は以下の表<sup>26</sup>で表している。

表1 メディアウムとミッテルの見取り図  
（（後藤 2019：90）より）

	メディアウムの	ミッテル的
1	媒介物・媒体	媒介する、コミュニケーション/ションする
2	モノ的	コト的
3	固定	流動
4	理論・体系	実践・素材
5	知識人	大衆
6	本	会話
7	安定的、自己肯定的	自己否定的
8	身分的、固定的	流動的
9	実体概念的	機能概念的
10	知識人と大衆の断絶性	知識人と大衆の互換性
11	一方向性	双方向性
12	間接性	直接性（透明性）
13	内なる弁証法	外なる弁証法

中井はヘーゲルの弁証法における（正⇔反）→合の図式を前提にしており、メディアウムは静的なので正と反の間にいて媒介項・仲人的な立場で両者を取り持つという、図式でいうところの⇔の部分に該当する。一方でミッテルは動的で相互のコミュニケーションの結果、正と反がお互いに批判し合い、合へとになっていく、→の部分に該当する。ミッテルでは媒介「する」という行為の側面が強い。

以上の表の延長として前章までの議論、学習科学やシステム思考、認知的不協和などの概念を代入して、ミッテルとメディアウムの対比の議論を組織論や認知資源論と連結させたらどのようなようになるだろうか。加藤らの「学習科学的」な姿勢の対立項は何かを考えると、それは「教員による上からの教育」が想定される。「学習科学」では双方向性を重視し新しく学ぶたびにそれまでの自分の殻を破壊し成長させるのに対して、「教員による上からの教育」は一方向的である。表1の11行目より、双方向性がミッテル、一方向性がメディアウムであるので、前者の学習科学がミッテル的であるのに対して、後者の「教員による上からの教育」はメディアウムのようになる。センゲや野中・竹内らが考える「学習する組織」は組織内の個々人の「学習科学的」的活動を組織的に支えるのに対して、その対立項は「上下関係で動く官僚制組織」で、後者は一方向的であるのでメディアウムのようになる。「学習する組織」で必要なマクロで複雑なシステムをループ状に把握する「システム思考」の対立項は、単純な原因・結果モデルである「因果論」である。加藤が師事したリースマンの類型論に即していえば、柔軟性に富んで異なる他者と交わり協調していく「他人指向型」に対しては、自

分の考えを強く持つ「内部指向型」が想定される。「他人指向型」は、自分の考えに凝り固まらないので、表1の7行目の「自己否定的」に通じ、ミッテルであるのに対して、「内部指向型」は「安定的、自己肯定的」であるのでメEDIUMになる。以上の対比は学習科学と教員による上からの教育との対比同様、前者がミッテル的であり、後者はメEDIUM的であるとまとめることができる。さらに、ミッテルは認知資源の消費が大きく認知的不協和を起しやすいため十分なタフネス性をもとに耐性がある状態を想定するが、メEDIUMでは認知資源の消費が小さい代わりにそもそも認知的不協和を回避することに親和的である。

以上の事項を表にまとめると以下ようになる。

表2 メEDIUMとミッテルの見取り図 拡張版1

	メEDIUM的	ミッテル的
14	教員による上からの教育的	学習科学的
15	官僚制組織的	学習する組織的
16	因果論的	システム思考的
17	内部指向型的	他人指向型的
18	認知資源消費小	認知資源消費大
19	認知的不協和から回避的	認知的不協和に対する耐性が十分ある

一方で、中井がミッテルを常に礼賛しているとも限らない、という複雑な側面もある。杉山（1983）は中井のテキストの中でもメEDIUMに親和的な側面にも着目し、「メEDIUMに支えられたミッテル」という立場も併存していることを示した。さらに杉山は「メEDIUMに支えられたミッテル」の立場を出した中井の論考「農村の思想」が1951年という最晩年のものであることに着目し、それまでの通説（例えば、稲葉（1987））である「メEDIUMからミッテル」を中井が唱え続けたと解釈する立場を批判し、最晩年に中井は広い意味で転向したものであると考えた。

杉山が唱えた「メEDIUMに支えられたミッテル」とは、確かに「メEDIUMからミッテル」と対比的に論じられている。しかし、「メEDIUMに支えられたミッテル」もまた大まかには「メEDIUMからミッテル」の流れ自体には乗っかっている（「メEDIUMから『メEDIUMに支えられた』ミッテル」という意味で）という点で、共通項も大きい。その上でどういう違いがあるかといえば、もし「メEDIUMからミッテル」をやりすぎてメEDIUMがなくなると理論や体系性がなくなり状況に流されがちな機会主義的なものになってしまう、という

問題を認識し、さらにそれを阻止しようとする発想の有無である。

杉山によれば、メEDIUMが一切存在せずにミッテルしかない状態は、それはそれで問題が発生するという。具体的には、中井は1945-48年、広島県の農村で文化運動をし、青年への夏期講座等を主宰し、中井自身はそこでカント講座を受け持ったが、そこで目覚めたはずの若者が両親らに接するとまた「封建遺制」<sup>27</sup>に囚われた行動を再び始めるという、ある意味での挫折を経験して、国立国会図書館に転身した。国立国会図書館に在職中の最晩年、その反省を籠めた「農村の思想」（1951）という小文を書く。その「農村の思想」において、農村の人物とはミッテルだけでそれを相対化する「思想としての体系的基盤が欠けている」（中井 1981b：151）と、中井が言及した点に、杉山は着目する（杉山 1983：157）。この「思想としての体系的基盤が欠けている」という中井の言葉は、ミッテルだけになれば、理論や体系性がなくなって状況に流されがちになり機会主義的になるということを指す。そうなった場合、結果的に知識人の立つ立場を失わせ、大衆と媒介するミッテルがかえって不可能になってしまうのではないかと、結局は理論と実践の双方、すなわちミッテルだけでなくメEDIUMも含めてどちらも必要だ、という穏健な立場を中井は採用したのではないかと、というものが杉山の主張になる。稲葉の唱えた「メEDIUMからミッテルへ」という中井解釈に対する大きな問題提起を、杉山は「ミッテルだけではミッテルが求めるものができなくなる」という形で行ったことになる。いいかえると稲葉の視点のみでは機会主義になる可能性があり、それへの対応も込めた発想をしているのが杉山であると、ここで評することができる。

後藤はこの杉山の議論を稲葉の議論と共に参照・比較して、結論としては稲葉と杉山どちらも当たっている面があると結論づけている（後藤 2016,2019）。中井は稲葉のいうように大まかには「メEDIUMからミッテル」の流れを指向しており、中井がメインの分野と考えている美学・美術分野や晩年に携わった図書館論の議論では「メEDIUMからミッテル」の傾向が著しい。一方で確かに、杉山が見出した論拠以外の、出版論でも「メEDIUMに支えられたミッテル」を主張する部分が、時期をまたいで存在していることも指摘している。後藤自身、中井が「メEDIUMからミッテル」か「メEDIUMに支えられたミッテル」のどちらの要素が強かったのか、彼の論文の執筆ごとに判断が揺れている。それは永遠に決着できない問題かもしれないが、本稿では加藤と中井の共通項を、フェスティンガーやペイトソン、戦略論（毛沢東、



等)の議論を補助線として見ていくことによって、この問題をよりメタレベルで捉えることが可能となり、一つの解決の糸口を見出すことにもつながりうるとも考えている<sup>28</sup>。

### 3.2 中井正一の諫官論

中井の諫官論については、後藤(2005)がまとめているので整理する。諫官とは、文字通り「諫める官吏」であるが、特に中国史上で言及される存在である。中国史では、王朝や時代ごとの変容があるにせよ、皇帝は強い権力を持ち臣下や民衆の生命や財産を大いに左右することができる存在である。その一方で、皇帝もまた人間であり、常にその政治的判断が正しいとは限らない。暗君ではなく名君(明君)であっても、常に正しい判断をできるとは限らず、それこそ認知資源上での限界や、認知的不協和に晒されて誤った判断をすることは十分にありうる。例えば、唐の第二代皇帝である太宗は中華王朝史の中でも拔群の名君であるとの評価をされる人物であるが、権力争いで兄弟を肅清(玄武門の変)して安定的な権力を握ったという暗い側面もなくはない。中華王朝では皇帝に忠告し、政治の得失について率直に、ときには厳しい意見を述べる諫官が設置された。唐の太宗にも魏徵・房玄齡・杜如晦・王珪などの名臣が諫官として太宗が誤ったことをしようとした際には容赦なく批判し、その対話録は唐代に『貞観政要』としてまとめられており、後の中華皇帝や日本の大名などに政治論の名著として読まれている。特に魏徵<sup>29</sup>は太宗を相手に激しく批判することも厭わず判断を最も撤回させた人物であり、後に太宗の数少ない失政の一つである高句麗遠征失敗時に「魏徵が生きていれば自分の愚策を撤回させてくれただろうに」と太宗を嘆かしたことで知られる。太宗のような明君とされる人物であっても、諫官が機能しなければ失策をしてしまう可能性が高まる、という教訓にもなっている。

もちろん、諫官をしっかり重用して反省することができる太宗はそれだけで十分に明君としての器を持つと評価できるだろう。魏徵のような諫官による皇帝の判断への批判は真剣であり、その分皇帝が見聞きしたくない厳しい現実を突きつけることになる。これは皇帝の認知資源を著しく消費させて、場合によってそのことによって認知的不協和が生じると、それによって認知と行動を悪い方向に変更させやすくすることにも繋がる。例えば、『春秋左氏伝』<sup>30</sup>では以下のようなエピソードがある。斉の宰相である崔杼が君主を殺し、その弟を王位に就けて傀儡とした際に、公文書記録係である太史は「崔杼、

其の君を弑す」と記述し、崔杼は激怒して太史を殺してしまう。次の太史は殺された太史の弟で、同様に「崔杼、其の君を弑す」と記述したので崔杼は次の太史も殺し、さらにその弟が次の太史になるも記述を曲げずついに記録が残ることが確定したので崔杼はついに諦めた。崔杼は宰相でナンバー2であるが、事実上トップの座にある十分な権力者であるといえる。このように権力者の気分を害する行動を取った場合は、死を覚悟しなければならない。特に、諫官は職務上命がけといっても過言ではない。

それでは、中井の諫官論とはどのようなものであろうか。中井は治安維持法違反で逮捕された後、執行猶予付き判決を得て、執行猶予期間終了後も、当局の監視下に置かれていた時期、北宋時代の司馬光『資治通鑑』を読み込んだ。中井は諫官が命を擲って諫言する点に感銘を受けている。中井自身は、マルクス主義者、自由主義者、キリスト教徒を纏めあげ、認知的不協和になりそうな人民戦線での状況を乗り越えつつ、日本を正しい方向に導こうとし、逮捕を覚悟して抵抗運動をしていた時期を振り返りながら、戦況の拡大期、蟄居の身ながらも自分らのそれまでの活動が政府に対する諫官の役割を担っていたと考えて、この本を読み進めていたと考えられる<sup>31</sup>。そこで、戦後の中井の文章「国立国会図書館の任務」(1948)では、死を覚悟しながらも職務をこなす諫官を中井は肯定的に論じる。そして戦後の中井は、当時の日本の諫官としては国立国会図書館職員を想定し、中華王朝における諫官と異なり、命を賭けずに済むことで自由に諫言できる、「知識人の夢」を体現できる存在であると語っている。「かかる奴隷的封建的な位置より放たれて、真に人間の自由な客観的知識として、政治に関与できるということは、いかに多くの、歴史の線下積みとなって、悲しみ、憤った知識人の夢であったであろうか」(中井1981b:216)。中井にとって国立国会図書館職員は中華王朝史上の諫官と異なり隷属的な立場で命を賭ける存在ではなくなったが、中華王朝においては皇帝、国立国会図書館においては国権の最高機関である国会に籍を置く議員たち——その背後に主権者たる国民がいる——、という、それぞれの時代の最高権力者たちに対して、場合によって職を賭し、下に仕える立場から常に真実を語る存在である点で、国立国会図書館員と諫官は依然として共通項があることになる。

諫官=真実を語る存在、という中井の公式は、その反対である嘘言論を踏まえることで、メディアウムとミッテルの議論と接続可能である。中井は国立国会図書館の職員は真実を語る存在として肯定的に描く一方で、他の論

においては嘘言についても肯定的に論じるという、一見矛盾した立場をとる。中井は「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」(1931)等において、カントの『純粋理性批判』と『実践理性批判』の対比を念頭に、前者は個人が思ったことである「確信」に近く、後者は「確信」したことを実践として複数者の承認を求めて化粧をしながら口に出す「主張」に関連するといひ(中井 1981a 267-268)、フッサールの弟子の法哲学者アドルフ・ライナッハ(1883-1917)に依拠して「確信」と「主張」という二つのタームを用い、両者の峻別を提起する。「確信」したことを「主張」するまでに、他者に受け入れられやすい形で加工する以上、それは「確信」から較べると多かれ少なかれ嘘言が「媒介する」ことになる。これは本来の思いである「確信」を受け入れてもらいやすく変えるという意味で、自己否定的であり、その点でミッテル的であるとまずいえる。なおかつ「確信」という自己の内にとどまるという意味で静的なものを、次には「主張」し、他者に「媒介する」という行為によって、他人を動かすという意味でも、ミッテル的なものである。その点でこれはメデイウム・ミッテル論に落とし込むことが可能である。中井の嘘言論は、コミュニケーションをレトリックという技術を媒介することで加工するという形で、芸術の技術性がミッテル的なものであるという中井の芸術論とも接続するものである。以上の点で、中井にとっての嘘言論とは、中井のメデイウム・ミッテル論の中でいえばミッテル的なものに相当する。

嘘言がミッテル的なものであれば、諫官=真実を語る存在たる国立国会図書館職員は単純にミッテル的というよりは、動かしがたい真実という意味での確信に支えられている点で、「メデイウムに支えられ」、そして場合によって命を擲ち他者に介入するという意味で自己否定的、「ミッテル」的なものである。また自己の確信というだけでなく書物や資料というメデイウムの媒介物に支えられているという意味でも、総じて「メデイウムに支えられたミッテル」であるといえる。

中井は戦前の国立図書館である帝国図書館と異なり、占領期 GHQ 傘下の CIE が図書館政策に介入する時代の国立国会図書館の副館長として本というメデイウムの媒介物に関する制度設計の仕事に従事することになり、また西田幾多郎や三木清が影響を受けたアメリカのプラグマティズム思想であるウィリアム・ジェームズとジョン・デューイの影響を中井も受けることとなった。それは中井自身や彼の『世界文化』での同人仲間が思想の科学研究会に戦後関わり、この研究会の事実上の主宰者の鶴見俊輔がアメリカで学んできたプラグマティズムにふ

れる機会が多かったことも関連しよう。そこでミッテルを基本的に志向しつつも、プラグマティズム的なメデイウム<sup>32</sup>の要素も中井は受け入れていったと後藤(2005)では解釈しているが、国立国会図書館での中井の仕事と中井に対するプラグマティズムの影響は、このようにメデイウムとミッテルとの関係についても見て取れると本稿では考えた。

ところで、諫官が自分の確信という意味でのメデイウムに支えられているとはいえ、彼らは自己否定的媒介という意味でのミッテルの要素も強く持つものであるのに対して、明確にメデイウムの存在として、諫官とは逆に、皇帝を甘い言葉で惑わして裏で利益を貪るという、これもまた中華王朝史上でよくいる存在である宦官に着目したい。ここで宦官について触れるのは、それが諫官と対比的な存在であるからである。宦官は中華王朝に限らずビザンツ帝国やオスマン帝国などユーラシアを中心に広く見られた存在であるが、要するに後宮・ハレムの管理をすることができる、男性器を切除された男性の官吏である。宦官は中華王朝を腐敗させ、何度も滅亡させる大きな原因を作ってきた存在であるが、その理由は、要するに上には卑屈で下には威圧的になる権威主義的パーソナリティ的な性格をしていたことによる(三田村 1963)。宦官は現代では存在しないが、宦官的な行為を行う現代の宦官は大組織を中心に広く存在している(沼上 2003)。現代の宦官は大統領や社長などの権力者の取り巻きとして情報を独占し、ゲートキーパーになることで権力者にも、下にも自分にとって都合の良い情報しか流さない情報の非対称性を悪用し利益を貪る。その欲望を達成するためにいじめを好み、空気を自分に都合の良い方向に誘導・操作を行うことで、縄張りの中では絶対的な存在として君臨する(松井 2018b、松井・中尾 2020)。また、宦官は承認欲求が強く人びとから人気を得たいという原理で動いているため、また上司に対してへりくだっているため、一見すると見栄えが良く可愛がられやすい。そのため側近として重用すると一見あるいは短期的に組織内コンフリクトを減らすのが、問題を先送りしたり隠ぺいしたり不確実性が高い現象をなかつたことにしたりする方法で誤魔化しているだけなので、長期的にはかえって害が増し組織が腐敗し組織全体が共倒れしやすくなるという点で、典型的なミクロの合理性によってマクロの合理性を潰す合成の誤謬を起こす人材である(松井 2020b)。こうした宦官は見栄えが良くて強力な権力を握り空気を支配しているだけでなく、派手な恣意行動を好むパフォーマー型と比較すると縄張りに籠り外部からの観察もされにくいいため、彼らを排除しよ

うとすると排除のコストが大きく失敗しやすいが、危機のときはあっさり排除されることが多い。なぜなら宦官はメデイウムの存在である以上、非線形的な変化が少ない平時にこそ強い存在であり、非線形的な変化が頻発してそもそも前提としている空気が流動的になった非常時・緊急時の場合は宦官の強みが失われるからである<sup>33</sup>。要するに宦官は自己保身、自己肯定的で自己の出世のみを意識する。その点で自己否定的な媒介のミッテルの逆になる。

以上の宦官の特徴をメデイウムとミッテルの見取り図に代入すると、以下の表のようになる。

表3 メデイウムとミッテルの見取り図 拡張版2

	メデイウムの	ミッテル的
20	宦官的（「歪んだ」ミッテルに支えられたメデイウム）	諫官的（メデイウムに支えられたミッテル）
21	空気操作的コミュニケーション	他者との分かり合いのコミュニケーション
22	いじめ・支配的	対等的
23	上に対してへりくだる	現実を見せる
24	周囲からの見栄えが良い	周囲から非難・誤解され嫌われやすい

古今問わず宦官は君主や社長を騙すなど、嘘言も厭わないという点では一見するとミッテル的な要素が色濃い。しかし、本来、ミッテルの嘘言は自己否定としての嘘言であるのに対して、宦官の嘘言の目的は上司や周囲が自由に媒介し経験・学習することを情報封鎖によって妨げて組織を硬直化させ、そのことで自己の利益を貪るという目的によって貫かれている。つまり自己否定の逆の自己肯定、保身であるので、基本はメデイウム志向であると評価できる。宦官に特徴的な空気操作、いじめと支配、上に対してへりくだる、見栄えをよくするなどの要素は自己保身という意味でメデイウムの要素である。他方、諫官は信念、その人の「確信」という意味でのメデイウムに支えられた自己否定的ミッテルを目指す。この自己否定とは命を顧みないという意味でまず自己否定であり、つぎに「主張」するため「確信」を場合によって受け入れられるように変えるという意味での自己否定である。学習科学や経験学習という点では、宦官は真実を隠すことにより、皇帝をはじめとする組織内メンバーが自己変容による組織改善を行うことを妨げることに成功する。諫官が逆に辛い現実を突きつけて自己変容や組織改善を促すのとは好対照である。認知資源・認知的不協和という点でも、宦官は耳が痛い事実を隠すことで認知的不協和の回避を行うのに対して、諫官は積極的に組織内

のメンバーに対して認知的不協和になりうる事実を突きつけて学習を促す。両者のスタンスはメデイウムの、ミッテル的という対比に上手くあてはまる。

つまり諫官がメデイウム要素を持ちつつもミッテルを志向する存在とするならば、宦官はその逆にミッテル要素を持ちつつもメデイウムを志向する、「歪んだ」ミッテルに支えられたメデイウムであると評価することができる。宦官と諫官<sup>34</sup>について、メデイウムとミッテルの観点から纏めると、宦官は嘘言を用い、信念があるというよりは本能的であるなど、ミッテルの要素がある一方で本質的にはメデイウム志向であり、諫官は信念を持ち体系性も勘案する点ではメデイウムの要素があるが、常に現実を把握するために意見や考えを修正する点で全体的にはミッテル志向である。

#### 4. 考察 先見者としての加藤秀俊

##### 4.1. 中井と加藤の共通項 長期的でマクロな視点による認知的不協和の打破

前章までの内容をまとめながら中井と加藤の関係、及びその特徴を考察する。中井は概ねメデイウムからミッテルへという志向を持ちながら、時と場合によりメデイウムに支えられたミッテルを支持することもあった。それは、中井のメデイウムとミッテルに対する考え方が時期や分野、またその時々に応じた戦略的な合理性によるものであると解釈することができる。それは、諫官に対する中井の考え方からもある程度想像することができる。つまり中井の戦前の人民戦線の組織化・運営においては、中で立場の違う者同士対等な議論をするので、ミッテルといえる。しかし反ファシズムという意味での大きな方向性は揺らがない。その点ではメデイウムに支えられたミッテルともいえる。中井が諫官に託した思いは、自らの信念、確信部分という意味でのメデイウムに支えられながら、権力者に対する臣下という下の立場から、場合によって命を賭して、権力者に対して対等性というミッテルを要求・発揮しようとするものであった。

加藤も独学や図書館の利用、調べものを推奨するなど学習科学的姿勢を持ち、「中間文化論」（1957）で高級文化と大衆文化の融合を唱えている。また、加藤も他人指向型による自由なコミュニケーションとサークルの形成を支持していることから、基本的にはミッテル志向である。もちろん加藤も社会学を専門として学問体系を知っている専門家・知識人として新書などを通じて読者との媒介と読者への啓蒙と二面的なメディア利用を行っている。部分的にメデイウムに支えられたミッテルの要

素もあると考えることができる。

こうした中井と加藤の特徴であるミッテル志向でメディアウムに支えられたミッテルも部分的に採用するスタイルは、恐らく多分に戦略的なものと評価できる。孫子やクラウゼヴィッツに代表される軍事戦略論や、野中・竹内やセンゲ、松尾へと続く組織学習論的な経営戦略論は、相矛盾する命題を適宜使い分けてどちらにも引っ張られずにいることを是とする考えを重視している。奇しくも野中は『戦略の本質』（2008）で毛沢東の『遊撃戦論』（1938=2014）を紹介し、矛盾のマネジメントと題して毛沢東の戦略を解説している。野中が紹介する毛沢東の動きはミッテル志向でありつつも、ミッテルとメディアウムに支えられたミッテルを使い分けているものであり、開かれた選択肢を提示し続けるという点でより高次のレベルでミッテル的であり、あえて不安定さを残しながら最後はアートとして軍事や経営の判断を統合するという一つの到達点<sup>35</sup>を示している。

だとすれば、中井のメディアウム・ミッテルに対する考え方は機会主義的である分、よりミッテル的であり、中井の代表作「委員会の論理」が、経営組織論をコミュニケーション論・メディア論として構築したとされることも同様の視点で考えたほうが良い。コミュニケーション論とメディア論がミッテル志向である場合、複数の命題同士が矛盾を起こしその矛盾を解決する手段は、最後にアートという達人芸になるほかないという孫子以来の経営戦略論の到達点に達する構造に中井は気づいていたのではないだろうか。こうした構造は理論と実務がどちらも高度に存在するもの、例えば外交や国家理性<sup>36</sup>などにも当てはまるが、中井はそれを「委員会」というサークルレベルの小集団を実例に考え、それを戦後は図書館制度構築の立場から応用したものである、と整合的に解釈することは十分に可能である。サークル活動を重んじる思想の科学のカルチャーの中にいる加藤も、概ね小集団をベースにしながらマスメディアや大学の場も使い分けていたという点で、中井と同じであったと解釈できる<sup>37</sup>。

こうした中井と加藤の共通点は何だろうか。それを見るためには、表2の中でミッテル的な要素として説明した学習する組織やシステム思考や、宦官の説明の中で出てきた宦官がミクロの合理性を追求して合成の誤謬を起こす存在である、という部分をここでは一度思い出すべきである。それらの事項から見えるメディアウムとミッテルの対比は以下の表ようになる。

表4 メディアウムとミッテルの見取り図 拡張版3

	メディアウムの	ミッテル的
25	ミクロ / 部分的な視点を持つこと	マクロ / 全体的な視点を持つこと
26	短期的	長期的
27	線形的	非線形的
28	コブラ	コブラの不在
29	量的	質的
30	個人的	協力的・集团的
31	合成の誤謬	合成の誤謬回避

メディアウムの宦官はミクロ的・部分的・短期的な最適解を、協力を拒否したり他者を支配したりすることで追求し、合成の誤謬を起こすことを厭わない。それに対してミッテルはマクロ的・全体的・長期的な全体最適を目指し、人々の協力の下で合成の誤謬回避を狙う。ちなみに中井は「個人的主観」から「集团的主体」への転換の時代に今、人類はあるということを主張している（中井 1981b : 215）。マクロで長期的な現象はシステム思考というループ図状のものとしてとらえる必要があるため非線形的・質的であり、メディアウムは相対的には線形的・量的なものとなる<sup>38</sup>。

ただし、ミッテルを目指して合成の誤謬を回避すべくマクロな思考をすることができる人物は、認知資源が豊富で認知的不協和になりにくい、精神的にタフな人間でなければ務まらない。例えば、信念はすでに説明したようにメディアウムの宦官であるが、直感的にはマクロ的・長期的なものでもあるように考えられるという矛盾がある。これを整合的に考えれば、本来メディアウムの宦官は現実には遭遇して認知的不協和に耐えて常に適宜変容していく＝ミッテル的な要素を入れて、永遠に更新し続けていくことでマクロ的・長期的にもなると考えられ<sup>39</sup>、直感的な認識に接近する。そのため、自分にできる範囲でのやりたいことを見極めつつ、マネジメント能力ごとの役割分担を他者と共にしていくしかない。その意味でミッテル志向の場合は他者との協力が不可欠である。一方で、メディアウム志向の場合、他者は自分の利益と相反する敵、ないしは利用できる「資源」とあるという考え方が親和的である。

加藤はこの点で、長期的でマクロな視点を持ち、タフネス性を誇り認知的不協和に対する耐性のある人物であると評価することができる。加藤の「中間文化論」は戦後の文化を高級文化、大衆文化、中間文化の時代に区分した上で高度成長期からバブル期まで続いた戦後の経済成長期の文化を見据える展望を可能にした。さらに、加藤は同僚の梅棹と共に情報社会論を唱え、新しく未来学を構築した<sup>40</sup>。加藤・梅棹・川喜田が情報社会論を唱え

始めたのは1962～1963年の段階であり、フリッツ・マツハルプやダニエル・ベルと同時期であり、アルビン・トフラーよりも先行している<sup>41</sup>。

こうした加藤の戦後文化や高度経済成長に対する肯定的立場は、藤田省三や江藤淳などに感情的な反発を呼び起こさせた。藤田は加藤を、天下国家を語っていないからダメであると批判し、江藤<sup>42</sup>と大江は丸山眞男の「日本の思想」論文（1957）をきっかけに発生した実感論争の際に、主体を大事にしない加藤はファシストであるという論調で攻撃している（久野・鶴見・藤田（2010）、橋川ほか（1958））。藤田及び江藤・大江の加藤批判は粗があるものである。天下国家の語り方としてミクロな事実を配列してマクロな社会を浮かび上がらせる加藤の（柳田由来の）手法が何故ダメなのかを藤田は説明できず、さらにそもそも天下国家を語ることが良くてそうでないものは低評価であるという藤田の価値基準自体が客観性に乏しい。江藤と大江は主体性があることはファシズムに流されない抵抗基盤となるという前提を共有しているが、当時日本人などの東洋人に比して主体性があるとされていた西洋人である、ドイツ人の支持で<sup>43</sup>ヒトラーが出現したことに対して説明できていない。しかも、加藤の議論は熟議と経験学習を大事にしているという点でむしろファシズムに簡単に流されない人間を作ると主張しており、そもそも加藤の議論を全く聞かずに勝手に誤読し思い込みに基づいて批判していることになる。

加藤の戦後文化や高度経済成長に対する肯定的立場に対して反発した藤田・江藤・大江は単に当時の講座派マルクス主義や講座派マルクス主義と親和的な戦後市民社会派などの立場に立つがゆえに批判したのだろうか。確かに藤田は戦後市民社会派の大家のうちの一人の丸山眞男の弟子で、当人も後に市民社会派を代表する政治学者となる人物であり、江藤は後に右派に転向するとはいえこのときは大江と共に藤田と親和的な立場であった。だが、松井（2020c）では当時共産党員で講座派マルクス主義の立場であった田口富久治が、そうであるにもかかわらず加藤に対して一定程度親和的な言説をしていることや、この論点では加藤と立場が異なる丸山眞門下の橋川文三も、同門の藤田とは逆に、加藤に肯定的な発言をしている（橋川ほか1958）ことを根拠に、単なる講座派の洗礼を受けているというイデオロギーの違いだけが理由でないことを示している<sup>44</sup>。松井（2020c）の分析では東京大学出身者はリースマンの他人指向型類型に対して批判的になることを推論しているが、認知資源や認知的不協和論を代入することで別の仮説も導出可能で

ある。加藤の「中間文化論」は現代から見れば妥当な説であり、藤田・江藤・大江の反発が的外れなのは、戦後に急速に戦前的な貧しい社会から脱却し変容してくるという現実に対して藤田・江藤・大江は認知的不協和を起こして現実を認めることが出来なかったからである、というものである。このように考えることで、田口や橋川が藤田たちと近い思想的立場であったにもかかわらず加藤の説に親和的であったことも、田口と橋川の精神の強靱さ・タフネス性や認知資源の豊富さ<sup>45</sup>という形で説明できる。

#### 4.2. 先見者とは何か

前節で説明した、長期的でマクロな視点を持ち、タフで強靱な精神を持つことで認知的不協和を打破できるような人物とはどのような人物だろうか。ここで、非学術系の雑誌（商業カルチャー誌）において松井（2018b）が取り纏めた概念である先見者について触れたい。先見者とは、文字通り「先見の明」があり、未来を見抜くことができるような人物である。プラグマティズムの哲学者チャールズ・サンダース・パースが提示した手法であるアブダクションと呼ばれる考え方は、少ない事例で大きなことを説明するという論理上の飛躍を行うことで大胆な説明を推論するものであるが、その際に事例として注目度が高い面白いものを見出して、その事例を上手く説明できる仮説を立てる。このアブダクションによって、事後的に考えて「先見の明」があったといえる複数の人物の事例を比較・分析し、そこから共通項を抽出した（松井2018b）。

その共通項は、以下の1～5の流れに沿って先見者と大衆が交互に行為するという理念型である。ここでいう大衆とは、ホセ・オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』（1929=2020）に記されるような、欲望が肥大化し横暴な言動を行う無責任で精神的に自立できていない普遍的存在を想定している。1、3、5の奇数が先見者側の行為であり、2、4の偶数が大衆側の行為となる。

- 1：未来を正確に予測して事実を告げる（未来予測）
- ↓
- 2：その事実は生々しいために大衆から無視されがちである（生々しさ→反感）
- ↓
- 3：それでも大衆を信じて事実を語る（信頼→言論活動）
- ↓
- 4：大衆に認知的不協和を起こさせ猛反発が起こる（盲目的拒否→反発）

↓

## 5: 大衆の理不尽さを学習して絶望する (理不尽→絶望)

1は、先見者は自身の目の届く範囲で根拠を拾い上げ、予測を組み立てているからである。先見者の思考法は帰納法やアブダクション的であり、加藤や中井について論じた通り学習科学・経験学習的なものである。ただし、この部分及び次の2の部分は3以降と比べると表に出にくく観測しにくいいため、3以降の推移からそれ以前にこのようなことがあったであろうと観測できない部分を推測している部分も多い。2は大衆が、自分自身に対しても他者に対しても悶着を起こさない、「現状に安住する、いい人でありたいし、他者からもそう思われたい」という欲望を持つために、先見者に対して起こす拒否反応である。その世界あるいは世間の中でよしとされている価値観から乖離しない、きれいごとを信じていると周囲から見られることはますます周囲から評価されて承認欲求を満たすことにつながる<sup>46</sup>。先見者が語る事実は先見者からすれば単なる事実であり心を揺さぶられるようなものではないが、先見者から提示されなければそもそも大衆は気付きもしなかった事項であり、無意識に観測することを恐れていたようなものである。ということは、大衆からすれば「不都合な事実」であり、このことを認知させられることは心理的に苦痛であるため、「生々しいもの」である。そしてそれゆえ、大衆は先見者に対して「反感」を抱く。3からは観測しやすい部分である。3では、大衆が見ようとし「不都合な現実」を先見者が突きつけさえすれば、たちまち大衆はこれを理解して認識を改め、状況の改善を行うであろうと先見者が予測することで発生する。4では、学習の結果、先見者は、大衆に無視されないような形で「不都合な現実」を突きつける手法を取ることで、大衆による先見者への反発は2のときと比べて激しくなる<sup>47</sup>。5になると、それまで先見者は大衆の認知能力を信じていたからこそ自身の予測を発表してきたのだが、4の結果を見たことにより、先見者は自分の意見が理解されないのかと激しく落胆あるいは憤慨するところに行きつく。先見者と大衆との相互影響と学習との結果、「先見の明」を持つこと自体が嫌われる要因となることがわかる。

先見者は生々しい現実に耐えられるが、大衆はそうではない。松井(2018b)で扱われた人物、例えば経済学者フリードリヒ・ハイエクは『隷従への道』(1944=2016)でナチスドイツとソ連が同根の存在であることを主張し、その点で先見者であったが、当時の英米はソ連と同盟しナチスドイツと戦っていたため、ほとんど同時

代の論者からは評価をされなかった。同盟国がじつは敵国同様の悪しき存在である、という命題は大衆(オルテガのいうにはたとえ職業が知識人であっても大勢順応型の人間は「大衆」に属する<sup>48</sup>)にとって受け入れ難く、受け入れられたのは明確にソ連が英米の敵として浮かび上がった冷戦期であった。上記の例から、以下のことも説明できる。先見者は認知資源を豊富に持ち、情報処理力が高くステレオタイプに流されにくく、瞬時に判断するヒューリスティックな処理だけでなく熟考を行うシステムティックな処理も行うが、そうした人間は少ない。それに対して多数を占める大衆はヒューリスティックの処理に頼ることが多い。その当時ソ連が敵であるか否かは関係なくその本質は何かを考えたハイエクに対して、大衆はそのときのポジションから直感的な判断をしていたのである。このように両者におけるタフネス性や認知資源の差が露呈する。

このタフネス性や認知資源の差を巡る先見者と大衆のずれの違いをさらにうまく説明するために、グレゴリー・ベイトソンの学習論(1972=2000)を導入できる。ベイトソンは学習をゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲの四つに分けており、数字が増えるごとにコンテキストを巡るメタ度が上昇しより複雑な回路になっていくものだろうと考えている。ゼロ学習とは、コンテキスト(既存の文脈)がない状態での自動的かつ単純な刺激による反応であり、機械的なものが想定される。学習Ⅰとは同一コンテキストに基づく慣れ・反復であり、心理学における行動主義の刺激・反応(S-R)モデルでの心理学実験室での様子が該当する。学習Ⅱは、状況に応じて変化するコンテキストの基準(コンテキスト・マーカー)変容を学ぶものであり、学校や会社の中でのOJT的な世間でのルール学習に該当する。例えば、会議やゼミの発表の場では先輩に対して果敢に異議を挟むことを推奨しつつ、そうでない場では先輩・後輩関係を考慮するようにする、というのはとある部署で学ばべき典型的なコンテキスト・マーカーである。学習Ⅲとは、コンテキスト・マーカーさえ複数用意して相対化するという最もメタな学習である。通常、とある教室や会社に馴染めばそのまま長年居座ることは容易であり楽なので、長年親しんできた常識が通用しない、別の常識で動いている場に遭遇したという状況にならない限りは、学習Ⅲは発生しない。そのため、学習Ⅲは機会の稀少性と実際に遭遇した場合の困難さという二つの点で難易度が高いが、後者の、実際に遭遇した際に失敗した場合はダブルバインドを引き起こしやすくなる。ダブルバインドとは、階層の異なるコンテキスト間で矛盾する命題をぶつけ続けられながら

も、その場から退去できない状態であり、不愉快でストレスの高い場に縛られる分、大いに自分の今までの常識を疑うきっかけになるという点では学習の進捗が深まるが、一方でその負担の大きさから精神が危険な状態になることも多いという点でリスクも存在する。

先見者も、先ほどの1～5の流れでは4→5の個所で、このペイトソンの理論でいうところのダブルバインドに遭遇し学習Ⅲに到達する。そのメカニズムは以下の通りである。

大衆は認知的不協和ゆえに自分の話を聞いてくれない  
↓  
しかし、大衆が学習をしない限り世の中は良くならない  
↓  
このジレンマは自分が世の中を良くしたいと思う限り終わらない  
↓  
だが、世の中を良くしたいと思うことは自らのアイデンティティとなっている（退去不可）

つまり、先見者が先見者として大衆が見たがらない真実を突きつけようとするのは己の存在意義であり、それは極めて難しいが、それを諦めることは自分自身を否定することに繋がる。こうした先見者が直面したダブルバインドの例としては、松井（2018b）では例えば『旧約聖書』の預言者エレミヤの事例が挙げられている。エレミヤは北からの災いを神の言葉として預言したが、王や民はエレミヤの不吉な預言に対して認知的不協和を起こして反感を覚え、その代わりに楽観的な未来を語る偽預言者の言葉を信じ、そもそもヤハウエの神ではなく周辺の諸民族が信仰するバアルを信仰する有様であった。ジレンマを解消できずにダブルバインドに陥ったエレミヤは預言を続けるも、バビロニア王ネブカドネザル二世によるエルサレム破壊とバビロン捕囚を止めることはできなかった。王や民に裏切られ続けたエレミヤの怒りは凄まじく、バビロニア王は神が遣わした懲罰であるとの預言も行っており、呪いの言葉を以て復讐することを神に祈った（古田 2020）。エレミヤの事例は先見者がダブルバインドに陥った際に当人はそれでも現実を突きつけ続ける形でダブルバインドの乗り越えに成功したものの、大衆とのコミュニケーションには失敗したパターンに属する<sup>49</sup>。

#### 4.3. 先見者と諫官の類似性

以上、前節で説明した先見者は、前の章で出てきた諫

官と親和性が高いと指摘できる。先見者は前節で挙げたハイエクや預言者エレミヤの事例からわかる通り、認知的不協和を起こさせるような皆が見たくない現実を、帰納法やアブダクションによって自らが知り、さらにそれを他者に見せようとする存在である。諫官もまた、皇帝に対して彼が見ようとしたくない現実を見せて考えを撤回させようとする。現実を見せる相手こそ、庶民を含めた大衆一般と皇帝という、地位としては天と地ほどの差がある者である、ということは出来るが、現代社会とは日本国憲法が示す通り国民主権の時代である。つまり相手は近代以前の皇帝等であれ近現代の民衆であれ、諫官なり先見者の諫める対象は、それぞれの時代の「主権者」であるという点では、同様の構図になっている。

また、先見者は諫官同様にミッテル志向でありつつも、メデイウムに支えられたミッテルとしての特徴も持つ。先見者は現代における皇帝の代替的存在である大衆に対して、嫌われてでも真実を訴え続ける存在である。よって、先見者と諫官はメデイウム・ミッテルの観点からも同様の存在であると指摘することができる。

その上で、ミッテル志向とメデイウムに支えられたミッテルの使い分けは戦略的なものであるという考察は、当然のごとく先見者にも該当する。先見者は基本的には真実を伝えようとするが、受け入れられないことも多い中、それでもある程度簡略化、部分的により受け入れられやすくするなどの妥協を行うことも多い<sup>50</sup>。これは嘘言を用いたミッテル的なものであるが、より広くミッテルか「メデイウムに支えられたミッテル」かを、使い分けられる。その点で、相矛盾する命題を抱えて使い分ける、アートとしての達人芸で最後は統合するという、広い意味でミッテル志向的なものである。

## 5. 結論 戦後メディア史における加藤秀俊の役割

これまでの章では、認知心理学の知見は中井のメデイウム・ミッテル論と接続することが可能であること、中井や加藤はミッテル志向とメデイウムに支えられたミッテルを使い分ける戦略的な視点を持ち、より広い意味でのミッテル志向的な発想をしていること、諫官・先見者的なもので認知的不協和に強く、強靱でタフネスな精神の持ち主であることを述べてきた。以上の話をまとめれば、加藤もまた諫官・先見者的な存在だった、という命題は十分に成り立つ。本章では最初にそのことについて、簡単に触れておきたい。

加藤が発表した「中間文化論」は現状、通説となって

いるが、当時は藤田省三と江藤淳、大江健三郎から理不尽で感情的な反発を受け、鶴見俊輔と田口富久治、橋川文三は加藤を擁護した。加藤はそれまでも、柳田民俗学のミクロな記述を集めて配列することでマクロな社会を浮かび上がらせる手法を用いて、膨大なデータを見聞きし、それを記述する文章を多く執筆し、それらを余すことなく描き切る役割を社会の中で担おうとしてきた。加藤は柳田の方法論を社会学に応用することで戦後日本社会の本質を見出して、次々と様々な文章を世に送り出し、リアリティのある描写と意外性のある視点を現実的な結論と組み合わせることに定評を得て、高度経済成長にまい進する戦後日本を肯定的にみるという、1980年代以前においては比較的少数派の立場を自らの役割と任じながら、論壇での独自の地位を確立していった。

そのような役割を果たすことの一環でマクロな社会を浮かび上がらせ、「中間文化論」を世に問うた。そこで大衆社会論と高度経済成長を擁護するという、前期近代的で主体性の確立を目指す内部指向型を理想とするタイプの人間が見たくない、認識したくない現実を突きつける結果となり、藤田や江藤や大江においては認知資源のオーバーフローと認知的不協和が起こったと考察できる。加藤は論壇では当時の通説である「日本＝近代化未達成」説に異論を述べて反発を受けたことは明白である。一方で、加藤はそうした反発を受けながらもメディア知識人として活躍し続けた人物であり、本稿のこれまでの章で触れた諫官や先見者としての機能・役割を果たしたことがわかる。加藤が諫官や先見者であるとするならば、帰納法とアブダクションによって淡々と現実の日本社会の様子を描写し説明する文章を世間に対して書き続けて<sup>51</sup>、他のメディア知識人が世間に広めている誤った説を、そのメディア知識人の反発を受けてでも正していくことは理にかなっている。

逆に加藤を擁護した中でも特に鶴見は、思想の科学研究会を主宰し、中井の意志を継いで（鶴見（2003））知識人と大衆の相互交流を目指しサークル形成を行うというミッテル、ないしはメディアムに支えられたミッテル的な要素を強く持つ人物であり、漫画について論じるなど大衆文化にも造詣が深く、精神的に強靱でタフネス性を誇り、認知資源が豊富であるため、藤田や江藤のように認知的不協和を起こさずに反発を起こさなかったと解釈できる<sup>52</sup>。なお、加藤を擁護した橋川、逆に加藤に反発した藤田も共に、思想の科学研究会の創設メンバー7名の一人である丸山眞男の弟子で、丸山と藤田は思想の科学に在籍しており、思想の科学研究会内部及び周辺でもこの点で温度差のあることが分かる。

ここで、新しく表5としてこれまでの表1～4までの項目の中から、加藤に特に関係するものをピックアップしてまとめよう。

表5 メディウムとミッテルの見取り図 加藤関連

	メディアム的	ミッテル的
1	媒介物・媒体	媒介する、コミュニケーション/ションする
3	固定	流動
4	理論・体系	実践・素材
6	本	会話
7	安定的、自己肯定的	自己否定的
8	身分的、固定的	流動的
9	実体概念的	機能概念的
10	知識人と大衆の断絶性	知識人と大衆の互換性
11	一方向性	双方向性
14	教員による上からの教育的	学習科学的
15	官僚制組織的	学習する組織的
16	因果論的	システム思考的
17	内部指向型的	他人指向型的
18	認知資源消費小	認知資源消費大
19	認知的不協和から回避的	認知的不協和に対する耐性が十分ある
20	宦官的（「歪んだ」ミッテルに支えられたメディアム）	諫官的（メディアムに支えられたミッテル）
21	空気操作的コミュニケーション	他者との分かり合いのコミュニケーション
23	上に対してへりくだる	現実を見せる
24	周囲からの見栄えが良い	周囲から非難・誤解され嫌われやすい
25	ミクロ/部分的な視点を持つこと	マクロ/全体的な視点を持つこと
26	短期的	長期的
27	線形的	非線形的

加藤は教員による上からの教育ではなく学習科学・経験学習的なものを大切にする知識人であり、得た経験による自己変容を重視するため、静的な媒体・媒介物＝メディアムではなく、媒介する行為＝ミッテル的である。これによって加藤は安定的・固定的な理論体系に安住せず、流動的・不安定な人間関係・コミュニケーションという双方向的な社会の中での無限の変化を是とする。これはリースマンのいう用語では内部指向型ではなく他人指向型的であり、アクティブな組織内学習・思考であるシステム思考を志向するため、認知資源の消費が大きく認知的不協和に常に晒される状況に耐えることを意味する。この態度は對他者としては諫官的に他者に現実を突きつけて周囲から嫌われてでも説得を行うものであるが、マクロで長期的で非線形的な複雑な現実を見据えた



ものであるため現実として妥当性が高く、先見者的なスタイルとなる。これらのメディアムとミッテルの対比の表から、ミッテルの究極の一つの姿が先見者であることが導かれる。

加藤が先見者だったのであれば、その戦後メディア史における役割・機能とは何だったのであろうか。戦後メディア史は竹内洋（2015）がいうように、「左翼に非ずんば人に非ず」という風潮が確かに強く、加藤の立場は高度経済成長の肯定論である限り左派から反発を受けやすい。さらに竹内（2014）はそうした前提の中で、藤田や江藤が抱く「公共知識人＝天下国家を語る」という図式から加藤がズレていることも、加藤が反発を受けた要因であったとする。竹内が分析するように、それは確かに卒業した大学の風土・ハビトゥスの違いが関連しているものの（松井 2020c）、あくまでそれらが形成するのは一つの傾向である。一方で、中井や鶴見など加藤と親和的な人物の中には左派知識人も一定数存在する。加藤に反発した江藤が後に右派に転じたように、加藤への反発あるいは親和的傾向は単純な思想の左右によるものではないことがわかる。以上の事例から推測するに、4.1でも触れたように、加藤の存在は、左右とは別の、「加藤と対応した人物は立場が異なっても話ができる人物であるか否か」を判定する機能を果たしたのではないだろうかと考えられる。加藤がそうした機能をどこまで持っていたか、また本人がその機能に対してどこまで自覚的にそれを自らの役割として認識していたかについては本稿の守備範囲を超えるものであり、このことは今後の課題として残る。今後の研究としては表層的な思想の左右とは別の、様々な側面が見出されることで、戦後メディア史の姿が様々な研究者たちによって更新されていくことを期待し、我々もその一助をなすことができるよう努めていきたい。

## 注

<sup>1</sup> 『孤独な群衆』の原著初版は1950年。日本語訳の初版は1955年に『孤独なる群衆』のタイトルで佐々木徹郎・鈴木幸寿・谷田部文吉が訳し、みすず書房から出版した。リースマンは1961年に改訂を行い、1961年版を1964年に加藤が『孤独な群衆』のタイトル名で訳し、みすず書房から出版した。その後、加藤は2013年に1961年版を1969年にリースマンが新しくつけた前書きと共に訳しなおし、新しい訳者後書きを加えた版をみすず書房から出している。2013年版は1964年版と異なり上下巻に分冊されている。

- <sup>2</sup> 前期近代と後期近代を区分する考え方は、ウェーバーが先駆的にプロテスタンティズム的な精神が失われてきたことを示唆している他、リースマンの後にアンソニー・ギデンズやジグムント・バウマンが後期近代の特徴を再帰的近代と名付けて論じている。とはいえ、前期近代の段階でエミール・デュルケムはアノミーと呼ばれる共同体（ゲマインシャフト）の溶解によるマイナスの影響を指摘しており、アノミー化が進展してきているという点では連続的であるといえる。暫定的には、前期近代化の時代ではアノミー化によってもある程度共同体は残存していることや、独立した個人が集まって会社などのゲゼルシャフトを形成し、それが疑似的にゲマインシャフトの要素を持つようになる（会社人間など）など、再結合の要素が後期近代化の時代に比べると強かった、という形で相違点を整理できるのではないと思われる。
- <sup>3</sup> 松井（2020c）では、加藤（2008）がリースマンの類型論を伝統指向型・内部指向型・他人指向型とは独立した形でさらに整理した上で適応型・アノミー型・自律型があり、3×3=9通りに細かく分けることが可能であるとまとめていることを紹介している。リースマンと加藤秀俊が理想としている類型は他人指向型かつ自律型である。
- <sup>4</sup> 無論、他人指向型の長所と内部指向型の短所、内部指向型の長所と他人指向型の短所は合わせ鏡の構造となっていて一対一対応している。内部指向型を評価し他人指向型を批判する論者が直ちに的外れというわけではない。
- <sup>5</sup> 実際、赤尾（2012）では学習科学的な思考を前提としている生涯学習論の教科書の中にセンゲのシステム思考・学習する組織を取り上げて生涯学習論的な文脈の中に消化しようとしている。
- <sup>6</sup> 野中は一橋大の教授を歴任しており、加藤が一橋の出身者であることを踏まえると学校文化（隠れたカリキュラム）上の親和性がある程度存在するということが可能である。一橋の学校風土については、竹内（2001）を参照のこと。
- <sup>7</sup> 野中と竹内は『知識創造企業』を英書として1995年に出版し、翌年邦訳が出ている。また、2020年には邦訳の新装版が新しいはしがきを付けて登場している。
- <sup>8</sup> 社会的ジレンマについて、ゲーム理論などの数理的な手法を駆使しながら、社会学や社会心理学などで多数の論考がなされている。その中でも代表的な古典として、組織の大きさとフリーライダーについて扱ったオルソン（1971=1996）がある。現代の研究水準

- として、社会的な視点のものは海野 (2021) や盛山 (2021)、心理学的なものは亀田 (2017) などがある。
- <sup>9</sup> こうした情報社会論について、進歩史観のもとで近代を越えたという視点を宣伝しがちであるが、実際のところはそうではないという見方がある。詳しくは佐藤 (2010) を参照のこと。
- <sup>10</sup> 加藤は京大教育学部に転任し一年だけ教育学部助教授となり、教育について論じたことがある。しかし、その年は大学紛争が発生しており、加藤は京大を辞めている。加藤は敵対的な学生に対しても対話を試み、夜自宅に招くなど、殺伐した雰囲気のを払しょくを考えていた (加藤 2021)。加藤は一橋大時代のゼミで指導教員である南博の家に招かれたことなどを回想しており、マスプロ的な講義ではなく、ゼミで「学習科学」の姿勢を培ったともいえる。奇しくも、この点で同じ考えに親和的な思想の科学会系の鶴見俊輔や永井道雄、川喜田二郎や高橋和巳などが大学紛争時に本務校を辞任している。
- <sup>11</sup> 米盛 (2007) によれば、アブダクションはある少数の特異な事例を観察することで、その事例を上手く説明できる仮説を構築するという思考法であり、帰納法はアブダクションなどで構築された仮説や既によく知られている仮説や理論を、より多くの事例に当てはめてチェックをする思考法である対比している。つまりアブダクションは仮説構築の方法で、帰納法はそれを確認する、いわば仮説論証の方法論であるという意味で、両者は対比されると同時に補完的であるという。さらに米盛は帰納法によってチェックも済んだと思われる仮説を理論と見なして、理論自体を論理的な推論に使う正しい命題が導かれるかを確認する演繹法によって確認している。
- <sup>12</sup> 本論では、これら加藤の書籍の詳細な分析はできておらず、今後の課題である。
- <sup>13</sup> フェスティンガーは、ナチス政権から逃れるためにドイツからアメリカに亡命した社会心理学者クルト・レヴィンの指導を受けている。クルト・レヴィンはゲシュタルト心理学の影響を受けて常に全体的な視点を持つ研究を心がけており、場の理論やグループ・ダイナミクス理論などを構築している。中井正一は「芸術における媒介の問題」(1947) でメディウムとミッテルを記憶と意識に対応させる形でクルト・レヴィンに言及し、彼の考え方をミッテル的であると肯定的に触れており (中井1965: 124)、中井に一定の影響を与えたものと思われるため、フェスティンガーと中井とはある程度以上の親和性がある。
- <sup>14</sup> 認知資源の限界に挑戦する難しさは松井 (2020a) を参照のこと。
- <sup>15</sup> 例えば、プラトンはソクラテスの論敵としてプロタゴラスを対話篇の中で登場させ、「人間は万物の尺度」という相対主義的で認識論的な立場をプロタゴラスが主張し、それをソクラテスが批判するものとして描いているが、これも認識論の初期のものと考えられる。
- <sup>16</sup> ここで最初に扱われるものは基礎づけ主義と呼ばれる、命題の根拠を問う考え方であるが、基礎づけ主義自体はプラトンの時代から存在しており、繰り返し問われる重要なものであることがわかる。基礎づけ主義とその批判及びそれ以後の認識論については、戸田山 (2002) を参照。
- <sup>17</sup> 連合心理学以前の心理学の萌芽とされる議論はアリストテレス『デ・アニマ』による、魂 (プシケー/プネウマ) の考察論 (高橋 2016) である。そう考えれば、認識論も認知心理学も、古代ギリシャからの伝統を受け継いだものであると考えることは十分に可能である。
- <sup>18</sup> ヴントによって心理学実験室が設置されたから心理学が哲学から独立した、という見方は、それはそれで一つの史観に過ぎない、という考え方がある。詳しくはサトウ (2011) を参照。
- <sup>19</sup> バシユールの同時代にルイ・アルチュセールは認識論的切断を自分のマルクス主義論に転用し、マルクス主義を正しく解釈するためには、ヘーゲルなど別のイデオロギーが認識を歪めてしまうため、これを取り除かなければならないという議論を行っている。アルチュセール流の認識論的切断論については、今村 (1997) を参照のこと。
- <sup>20</sup> グラムシの主張はムッソリーニ政権に逮捕された獄中での思索でなされ、没後、『獄中ノート』としてまとめられた。
- <sup>21</sup> 間々田 (2000) は消費社会を動かす原理をジョン・ケネス・ガルブレイスの企業プロモーション論 (ガルブレイス (1984=2006)) とジャン・ボードリヤール (1970=2015) による差分の価値論などいくつかの考え方に分類している。ガルブレイスとボードリヤールはプロパガンダやメディア、コミュニケーションのそれぞれの側面を切り取ったものであると本論の立場からは評価できる。
- <sup>22</sup> 中井の論考は全四巻の全集に収録されている。美術出版社より1964年から出版され、1981年に完結している。何れの巻でも久野収が編者として携わっている。

ただし最初に出た巻が1964年（第3巻）、次に出た巻が1965年（第2巻）で、それからなぜか16年空けて1981年ようやく第1巻と第4巻が出ていて、後半部分が図書館論中心の第4巻は、国立国会図書館職員でJICST（科学技術情報センター）出向中の中井浩（のちJICST理事、常磐大学教授。中井正一の長男）が実質後半部分の多くを編集していると思われる（この巻の巻末は「解説」鶴見俊輔、「解題」中井浩、「年譜」稲村徹元で、久野は一切文章を載せていない）。なお木下長宏（1995）はこの全集に収録漏れの著作がいくつかあり、また仮名遣い表記等も、初出雑誌と異なり、新字体新仮名遣いに改める方法が恣意的であると批判しているが、後藤（2005）は、彼の父親の最初の単著『陥没の世代』（中央公論社,1957,新書版）出版仲介の労をとった久野に恩義を感じているので、この木下の批判の妥当性は認めつつも全体として見れば些末なこととして基本的に一蹴している。なお岩波文庫になった長田弘編『中井正一評論集』（1995）も全集を底本とするとの断り書きがついているが、全集に収録漏れの重要な論文「気（け、き）の日本語としての変遷」（1947）も収めている。なお中公文庫から出された『美学入門』（2010）（解説・後藤嘉宏）は、中公文庫の編集部が初出の河出市民文庫版（1951）を忠実に新字体新仮名遣いに改めていて、木下の批判に呼応している。

<sup>23</sup> 羽仁は中井を館長に推薦しようとし、松平恆雄参議院議長らの提案で、中井の親友新村猛の父親新村出京大元図書館長の推薦状を得るという条件が示され、それがかなったことで、参議院の総意を得るが、中井の政治的立場が左派であることを理由に衆議院の反対に遭い、中井が副館長としておさまり、代わりに館長として戦前からのリベラル派で憲法担当国務大臣も務めた金森徳次郎が就任した。

<sup>24</sup> ジョヴァンニ・サルトーリ（2009）は政党システムを区分し、一党制及び他党が存在していてもそれは強力な政党の衛生政党でしかないヘゲモニー政党制の二つを非民主主義的なものとしている。戦前の日本は政党が解散し大政翼賛会になり、東條内閣のもとで翼賛選挙が行われてもナチス党やファシスト党、ソ連共産党のような形で機能せず（佐藤ほか2017）、東條内閣時であっても非翼賛議員が多数誕生し議会で東條内閣批判が行われるなど、議会そのものは機能していた。さらに、陸軍は海軍や議会、宮中など様々な機関と比べて著しく強い力を持っていたわけではなく、陸軍内部でさえ皇道派と統制派が争い、首相の在任年

数は極めて短く何度も交代した。そのため、より正確には当時の軍国主義化していた日本の政治体制は一党独裁制や全体主義・ファシズムとは言えないが、ファシズムを目指そうとした近衛新体制運動や陸軍皇道派・統制派がファシズムへの到達という点では明治憲法が政治システム上分権を強要するために未完に終わりつつ（片山2012）も、一定以上程度の影響力を持った。そのため、これは大正期よりは非民主主義的な体制であるので、権威主義体制、「未完のファシズム」といえる。

<sup>25</sup> 英語のtolerate（耐える）の派生語としてtolerance（寛容）があることから、耐えることと寛容とは語源的にも結びつく。

<sup>26</sup> 後藤のこうした分類学的な類型論に対して、現在後藤が会長を務める思想の科学研究会の事務局長である本間伸一郎（2021）は後藤（2019）を読み込んだ上で、固定的に考えすぎで実体概念を目指すものになってはないかと批判し、機能概念としてメディウムとミッテルを考えるべきではないかと述べた。それに対して後藤（2021a）は、本間の主張を受け止めつつも、分類学的な類型論がそもそも機能概念的なものであると述べて本間の批判が空回りに終わっている面もありうると指摘している。

<sup>27</sup> 中井の視点では、青年たちの両親をはじめとする農村の人びとが前近代的な思考を色濃く残すことは封建遺制と理解されたが、封建遺制はあくまで講座派の影響を受けた当時のインテリの用語・概念であり、中世日本に存在した封建制度や封建制度を支えた思想そのものと重なるわけではない。なお、中井はマルクス主義者ではないが、第三高等学校弁論部での友人に服部之総がいて、服部が京都に戻る機会にはしばしば会って当時中井宅に居候していた自分は席を外させられたと、久野収が証言しており、中井を国立国会図書館副館長に推薦した羽仁五郎も服部同様、講座派の代表的論客であった。つまり、中井本人の思想とは別に、周囲の環境上講座派的な専門用語を自然と使いやすい土壌があったことは確かである。

<sup>28</sup> 問題が決着したら問いは閉じられてしまい、メディウム的であると考えれば、永遠に終わらない問いはミッテル的である、といういい方は可能である。実際、中井の「委員会の論理」（1936）の最終節は、問と答えの永遠の螺旋状ループにも譬えられている（後藤2018）。もちろん、ミッテル的だ、という答えが永続化すればメディウムのものに転じるという逆説があるし、本間（2021）の後藤批判に、その側面へ

の批判の含みもある。本論ではそうした逆説に対して、フェスティンガーやベイトソン、毛沢東などの戦略論と接続する形でミッテルとメディウムに支えられたミッテルを相補的に使い分けることが戦略論的であると、そうした戦略論的立場を採用する場合、使い分け自体は永遠に終わらず、その原則も不明瞭なままであることから、メタな視点からミッテルであることを示唆した。

<sup>29</sup> 太宗も年々傲慢になり、晩年には魏徴を疎んじていったことがわかっている（呉 2021）。

<sup>30</sup> 孔子の弟子である左丘明が編集したともいわれる、『春秋』の注釈書である。

<sup>31</sup> 当時、『統国訳漢文大成』が国民文庫刊行会から出版されてその中に『資治通鑑』が含まれており、中井はこれを読むことができた（中井1981b: 115）。「組織への再編成」（1950）で中井は次のように語る。「私は途中で二ヶ月ばかり巻を閉じて読むのをやめた。肉体的に痛くなったからである。自分が二年くらいの判決でビクつきながら自由を求めているのに、このインテリたちは、黙っていれば最高の官職で帝王の近側でいられるものを、一言ずついて何の効果もないことが分かっている、なおも死んでゆくのである。このことを思うとき私は涙が出て出てたまらなかった。私たちの及びがたきインテリどもが『資治通鑑』の中に数かぎりなく自分をにらんでいるようだった。私は国立国会図書館の任務につくとき、ふと、ゾーッとしたことがある。あの諫官達は、東海の一島国にインテリの組織が、組織的に政治に奉仕するときにくるに違いないという歴史への信頼をもって死んでいったんじゃないだろうか」（中井1981b: 115-116）。

<sup>32</sup> 中井は『美学入門』の中でデューイの美学をメディウムのなものを前提にしていると考えて肯定している（中井1964:132）。つまり本稿の表現でいえば「メディウムに支えられたミッテル」と考えているわけだが、プラグマティズム自体は常に問いを立てて疑問を解決することを考えておりミッテル的な要素が強い。これを中井の解釈違いや混乱と捉えることも可能であるが、すでに注釈28で触れたように、「ミッテル」と「メディウムに支えられたミッテル」を相補的に使い分けるといふ戦略論的な、メタな視点からのミッテル的なものと考えの方がより整合的であると思われる。

<sup>33</sup> 沼上（2003）では、宦官的な人材が組織を腐らせている場合は強権的に彼らを排除することが有効である旨を経営戦略論・組織論の知見を用いて説明している。なお、ここでふれた「線形的」＝メディウム、

「非線形的」＝ミッテル、という図式については、表4の「メディウムとミッテルの見取り図 拡張版3」にて後述される。

<sup>34</sup> 宦官と諫官は、立場は私益か公益かに分かれてメディウム志向かミッテル志向という点では対極的であるが、一方でそのためにコミュニケーションを用いて説得を試みることや、共にメディウム要素とミッテル要素があることなど、同じ平面上に存在するが故に対比的であるという側面もある。このことを今後考察するヒントとして若干思考実験を行う。諫官が役立つのは本論の上からも自明であるが、宦官はどうだろうか。進化心理学の知見（例えば長谷川・長谷川（2000）は、例えば共感性に乏しいサイコパスも何かしら生存に有利で社会に意義があるから、社会の中に一定数存在することが説明（原田 2018）されるが、宦官も同様の構造の中にいると考えられる。宦官によって組織が崩壊することは、そのことによってそれまでの社会の矛盾や格差などが露呈して社会変動を促すことで、新しい時代を作り上げていくという、人類という種の発展・多様性に貢献する点で、人類史的な俯瞰的視点では確かに宦官は意義（ドーキンス 1976=2018）があるといえる。これは宮沢孝幸や福岡伸一がウイルスの効用について盛んにいうこととも、また近い。古くは寺田寅彦が「蛆の効用」というタイトルのエッセーも書いて菌の有益性に言及している（後藤 2021b）。俯瞰的視点は諫官・先見者の視点であり、宦官と諫官がやはり同じ地平に立つ、永遠の宿敵として両者が共存することが、人類史に新しい時代を切り拓く方向に機能するのではないかとの仮説が立つ。

<sup>35</sup> 『戦略の本質』では続いてバトル・オブ・ブリテン時のイギリスのウィンストン・チャーチル首相、スターリングラード戦のときのソ連のゲオルギー・ジューコフ元帥、朝鮮戦争時のアメリカ軍のダグラス・マッカーサー元帥、第四次中東戦争時のエジプトのアンワル・アッ＝サダト大統領、ベトナム戦争のときの北ベトナム軍のヴォー・グエン・ザップ将軍による巧みな逆転劇を紹介しているが、これらも毛沢東と共通している。ちなみに、毛の『実践論』『矛盾論』と中井の「委員会の論理」との近接性は、後の文化功労者で京大人文研における加藤の先輩でもある上山春平が、若い頃、『思想の科学』に載せた論文において強調して論じている（上山 1998）。上山は毛のプラグマティズムとの親和性についても論じて日本共産党の幹部である上田耕一郎から批判されており（上

山 2005)、毛のミッテル志向的側面に上山は気づき、日本共産党幹部はそういった見方に対して認知的不協和を起こしたと思われる。以上の話は戦後史上極めて興味深い。

<sup>36</sup> 外交での利益の争いと誠実な態度の重要性の矛盾については典型的にはカリエール『外交談判法』(1716=1978) やハロルド・ニコルソン『外交』(1963=1968)、国家理性における政治と道徳の矛盾についてはフリードリヒ・マイネッケ『近代史における国家理性の理念』(1924=2016) などで描かれている。

<sup>37</sup> 加藤(1977)は本稿本文2.2の第一段落で触れた、カットとラザースフェルドの二段階の流れ仮説を追試してサークル活動をする中間団体の意義を実証している。

<sup>38</sup> 中井は『美学入門』(1951)においてコブラの不在ということを用いる。映画のカットとカットは、「である」「でない」「に違いない」「かもしれない」といった、コブラ(繫詞)がない点に特徴があるという(中井1964:68)。このコブラは通常の文章において、文章の送り手の事態に対する判断を指し示すものである。映画はこのコブラがない。要するに映像の文脈なり、その判断・評価は控えた、カットの提示の連続となる。映像の意味を判断し、文脈を形成する作業は、受け手に委ねられる。コブラがあればカットとカットの間の論理関係は送り手から示され、線形的に論理展開する。しかしコブラがないので、論理関係は受け手自身が模索するし、線形的なつながり以外の複雑な関係も受け手自身で模索できるし、一切の論理関係のない、単なるカットの並列と捉えられる可能性もある。その意味でこのコブラの不在の議論は、非線形論理に通じる。この中井の議論はアンリ・ベルクソンの時間論(1889=2001)での線形時間(ニュートンによる時計の針で量的に刻まれる≒空間化された時間)と生物として経験を味わうときの流れる時間との対比に繋がる(中井1964:103-106)。コブラがあることによって論理展開が示されて線形的に議論が流れるのが文章であるならば、時計によって空間化・数量化された時間もまた作り手である時計職人・メーカー、さらには職人やメーカーが従う世界標準時子午線の論理を受け手が受容することになる。それに対して、質的に流れる時間(純粹持続)も映画同様にコブラの不在故にカットの連続になるので論理関係が一切ない非線形論理的なものに通じる。これらも表4のようにそれぞれ前者がメディウム、後者がミッテルと親和的であることが示される。

<sup>39</sup> 中井晩年の『日本の美』(1952)では、伊勢神宮の遷宮に言及し、長い年月同じ形を保つために、逆に一定間隔ごとに古いものを脱ぎ捨て更新していく姿を「日本の美」の典型として称賛している(中井1965)。「日本の神殿の中心である伊勢神宮が二十一年ごとに建てかえられつづけながら、ここに一千年もの間、しかも減びることもなく、その様式方法も変えられることもなく、ここにいたっていることも、まことに注意すべきことであります」(中井1965:226)。また次のように述べる。「二十一年の僅かな歲月も、もし、それが素木で作られているならば、それは、古くならずむものとなるのであります。汚れることとなるのであります。だからあえて、素木を用いて造る時、すでに脱出の用意をしながら、そのうつりゆく清純な生成感、生きているという「なまな香り」を神殿の本質と考えようとしたことは、世界に類例のない、民衆の「こころ」であります」(中井1965:227)。

<sup>40</sup> 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌』(創元社、2014年)では「『放送朝日』の一九六七年一月号に掲載された論考で最も注目すべきは、梅棹・小松・加藤・林雄二郎による座談会「どうなる・どうする——未来学誕生」であろう」(竹内・佐藤・稲垣2014:285)と記され、さらに梅棹らは「どうする」未来学ばかりが注目される現状を憂いて「どうなる」未来学を打ち立てようとしていると、赤上裕幸に指摘されている。

<sup>41</sup> 無論、彼らの情報社会論は共通項はあるものの細かい点や力点は異なる。例えば加藤が書いた中公新書刊行のことばでは技術発展に言及する点で情報社会論一般と同様の技術決定論に見えるが、技術によって「書物の大量需要の潜在性が形成された」と書くなど社会決定論の要素も勘案している。

<sup>42</sup> 江藤は対加藤だけでなく一方的な思い込みや誤読で暴走しがちな面があることが他の場面でもたびたび出てくる。江藤は実感論争と呼ばれる論争の最中加藤だけでなく梅棹忠夫と後藤宏行も含めて三人を十把一絡げに纏めてファシストであると批判し(江藤(1957)、江藤(1958))、あまりの会話の不能さに加藤が「江藤氏のような紳士をやくざにたとえるのは恐縮だが、本紙四月二十一日号の「加藤秀俊の実感主義」に関するかぎりは、「それが合わねえ」といった理由で挑戦されているとしか思えなかった」「江藤式フィルターはかくのごとく屈折率の高いシロモノであるから本当なら何も口答えしないほうが賢明なのかもしれない。何を言っても、こう歪みの強い解釈をう

けるのでは、生産的な論争になりそうもないからである」と書くなど加藤を怒らせて（加藤 1958）おり、直接的な対峙の場（橋川ほか1958）でも会話は通じず物別れに終わった。右派に転向した後の江藤にもそういったエピソードがあり、例えばアメリカに対する肯定的文脈・否定的文脈を巡って山崎正和と高坂正堯の好意を無碍にする行為を江藤は行っている（片山 2021）。山崎は江藤の評論家としての腕は江藤の最期まで高く評価しており、江藤に無礼なことをされたにもかかわらず交流を保ったという点で本稿の視点でいえば山崎は加藤や中井同様に認知的不協和に晒されても耐えきった強靱な心の持ち主であったと評価できるが、山崎正和論は本稿の守備範囲を超えているため今後の研究課題である。

<sup>43</sup> 実際ハンナ・アレント（1964=2017）は、ユダヤ人強制収容所の責任者ルドルフ・アイヒマンがイスラエルの法廷で見せた姿から、西洋人として主体性がどこまであるのかという疑問を提示している。

<sup>44</sup> 趙（2017）は同じ丸山門下である藤田省三と松下圭一とを比較して、藤田が高度経済成長に対して批判的な目を向けていた一方で松下は肯定的であったとして、好対照であったと分析している。本稿で触れた藤田の対加藤の言説、松井（2020c）で出てくる松下のマルクス主義からズレた大衆社会論的分析（1994）などはその傍証である。この本は松下が戦後から書いてきた論考をまとめたものであり大衆社会論的分析自体は50年代に発表した文章であり、それでもマルクス主義的な用語や概念を無理して使っているが、文庫版の松下自身の解説ではそうしたものは時代的なものであるとあっさりとして認めてしまっている。

<sup>45</sup> もっとも、田口が他人指向型を巡っては加藤と立場が異なったことを勘案すると、本稿での認知資源・認知的不協和説と松井（2020c）での東大卒との相関説はある程度相補的に考えることが可能である。つまり、東大という学習環境で学ぶとある程度認知資源の余裕がなくなり認知的不協和に陥りやすくなる、という仮説が導出される。実際、本稿でタフネス性がある、認知的不協和に強いと述べた中では加藤・中井・鶴見など非東大出身者が多く、田口や橋川といった東大出身者は少ない。もちろん江藤のように非東大卒でも認知的不協和になりやすい人物もいるように、あくまで傾向の話であることには注意したい。

<sup>46</sup> 戦時中の日本で愛国主義を叫び、戦後になると反省したと称して人権や民主主義に転向するような事例は全国で枚挙に暇がないが、そういう事例を想起すれば

良い。例えば、思想の科学研究会編『共同研究 転向』で出てくる西田幾多郎門下の哲学者柳田謙十郎は戦時中に右派に転向して過激な愛国主義を主張したかと思えば戦後になると共産党を支持し過激な左派に転向した人物であり、柳田の項目の執筆担当である後藤宏行に過激なものから過激なものに移っただけと手厳しく批判されている（後藤 1960：273-338）。清水幾太郎は、学生時代はマルクス主義の立場から社会学科にいながら反社会学を唱え、次第にデューイのプラグマティズムと社会学を擁護するようになり、戦時になると愛国主義の風潮に乗り、戦争が終わると当初は皆が左派に走るのを冷たい目で見ていたものの次第に反戦運動のリーダーとなり、安保闘争後は反戦運動から距離を置き最晩年には右派に転じたという点で何度も転向した人物である（竹内 2018）。清水は常に勉強をし経験を積めば徐々に考えが変わっていくのだから、少しずつ誰しも転向していっていると主張し（清水 1972）、実際今までの自分の考えで説明できない事象にぶつかるとうろたえつつも受け入れて考えを新しくするような姿勢（庄司 2020）——いわばミッテル的な姿勢——が伺えるが、清水はメディア知識人として世間から人気を得たいという打算も働いており、その欲求はそれによってお金を稼ぎたいなどの手段としてではなく、承認欲求という目的そのものとなっている「愛情乞食」である（竹内 2018）要素が極めて大きいことは否めない。柳田や清水の事例は極端ではあるものの、こうした人間の弱さは誰しも持つものである、ということには自覚的である必要はあろう。

<sup>47</sup> 松井（2018b）で事実をある程度捻じ曲げて嘘を混ぜても大衆が受け入れられる言説に加工することで対処が可能であることを示しているが、これはライナッハの嘘言の媒介を用いた説明が可能であると、本論を踏まえて付け加えることが可能である。こうした形のミッテルについては4.3の末尾では、ミッテルか「メディアウムに支えられたミッテル」かを戦略的に使い分けるのでよりメタな視点から見た広い意味でのミッテル的なものであると記している。

<sup>48</sup> オルテガは、特に自分の専門分野には詳しいがそれ以外の分野では無知な専門知識人を、大衆化した知識人の典型と考えて批判している。自分の専門分野以外では知識人として理性的な判断を下せず、結果的に周囲の人間に流されてしまいがちであること、さらには専門知識人としての名声や影響力を利用する形で大衆の中のリーダー的存在としてふるまうや

すいことを理由としている。ハイエクの事例でいうのであれば、例えば同時代の知識人でハイエクにとってはロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの同僚でもあるハロルド・ラスキは政治学者・イギリス労働党幹部として著名であったが、現代の視点から見れば、ソ連は様々な悪事を行っていたにもかかわらず、当時の欧米左派の多くの雰囲気流されてソ連に対して甘い判断をしていた。スターリン批判の前ということもありソ連は情報統制もあって良いイメージを纏っていた時期であるが、すでにジョージ・オーウェルが『カタロニア賛歌』でその内実を暴露しているような情報も流通しだしていたというのに、ラスキが公共知識人として名高い（大井 2019）にもかかわらずに誤った判断をしていたことに鑑みると、オルテガのいう大衆の射程範囲はかなり広いものであると解釈できる。

<sup>49</sup> 対大衆コミュニケーションへの成功あるいは失敗は事後的に判断する他、判断の術がない上に、ある部分と別の部分、時代ごとなどでその評価は変容せざるを得ない。例えばエレミヤは当事者としてはコミュニケーションに失敗したものの、バビロンに連行されて苦痛を噛みしめることで、ユダヤ人たちは自らがヤハウエへの信仰を失いエレミヤを信じなかったことを悟り、深く悔い改め、この記録は『旧約聖書』の中で永遠に刻まれることとなった。そう考えれば、エレミヤは死後その説得には成功したと評価することもできる。

<sup>50</sup> 加藤の「中間文化論」は大衆文化的な光文社（講談社と同じ音羽グループ）が堅い岩波書店等が出す学術書に多少近づいたカッパブックス（新書）と、エリート文化・知識人対象の岩波書店が大衆的な講談社が出す娯楽書に多少近づけた岩波新書が、それぞれ、いずれも大差ない内容になっていて、大学卒のサラリーマンという新中間層向けの書物になっていると論じる。このことを岩波の側から考えると、学術書の難解な言い回しというのはいわば中井・ライナッハの用語では「確信」に相当するが、その「確信」を「主張」のために単純化し、受けいれられやすいように加工するという意味で、嘘言が媒介すると解釈できる。こう考えると加藤の初期の代表的著作と中井との照応関係はより明確化する。光文社側からの説明は今述べた岩波の側からの説明ほど、明快にはできないが、野間清治以来の大衆路線が講談社、光文社等の音羽グループの社是であったのに、その社是という「確信」部分を多少歪めてでも、カッパブックスを出

し、大卒のインテリが大挙して「新中間層」という名の「大衆」に参入する状況に対処する必要があった。本文の2.1で挙げた井口一郎『マス・コミュニケーション』は1951年の光文社刊行の学術書であるが、内川芳美や竹内郁郎といったその道の権威から後年高く評価された本であるし、同書の初版巻末には光文社の本の自社広告が三頁に亘り載っているが（なぜか筑波大図情図書館に保管されている第五版では一頁のみ）、最初は、広告の一頁目の半頁を使った、南博『社会心理学』である。南は加藤の指導教授である。この南の本のタイトルは概説書的ではあるが、「毎日出版文化賞」受賞と書かれている。次が一頁目の下半分の五分の三使った、福武直と日高六郎共著の『社会学』の広告である。南も日高も思想の科学研究会の有力メンバーであった。つぎが八杉龍一の『生物学』だが、この本は1950年度の毎日出版文化賞の候補に上がり、このあと同じ光文社から出した『動物の子どもたち』（1951）で八杉はこの賞を受けている。要するにカッパブックス（1954～2005年）の前史として光文社は多くの啓蒙的な学術書を出して権威ある賞を受けていた。また次の広告二頁目は六冊分広告が載っているが、そのうち三冊は望月衛『青年心理学』、宮原誠一編『社会教育』、宮原誠一著『教育原理』で、いずれも著者あるいは編著者は1950年度の会員名簿時点で思想の科学のメンバーである。ちなみにこの宮原編『社会教育』には中井正一も「図書館」という章を寄稿している。このように加藤の「中間文化論」の中間性、媒介性と思想の科学研究会とは極めて親和性があるといえる。

<sup>51</sup> ここで「誤った説」と本文で述べているし、前の方でもそういう真偽・正邪がア prioriにあるかのような記述が本稿にあるが、本稿は思想の科学研究会の文脈において加藤秀俊を位置づける試みであり、思想の科学研究会の思想的多元主義と説の絶対的な真偽・正邪という言い方とは相容れないところがある。本稿で真偽・正邪をいうのは鶴見俊輔や加藤が依拠するプラグマティズムにおける意味での正しい・正しくないというレベルで言っているにすぎない。分かりやすい事例で言えば「西暦2022年2月時点での日本国の首都は札幌である」、「松井勇起は不老不死である」のような明確に偽と判定して良い命題はあるので、真偽は相対化できるといってもその範囲には一応限界がある。その上で、上述のような例を除いて、パースのいうプラグマティズムの格率とジェームズの有用性論を勘案すると、その認識の真偽はそ

の人を幸福にできたか、その概念で有用性を得られたかを基準に決めることができる。例えば、A国の軍隊が隣のB国を攻撃するか否かは実際に攻撃があるまで不明であるが、C国の有する軍事衛星情報等からその兆候を見て「A国軍がB国を攻撃するものだとB国は思っておいて軍備増強などの対処をしておく方が有用」という形で命題を有用性のレベルに還元できる。

<sup>52</sup> 鶴見はミッテル志向であるが、加藤と同じく論客たちに認知的不協和を起こさせて反発を受けたタイプの人間であるかは別である。加藤と鶴見の違いの有無やその内実は、今後の考察対象となる。

## 参考文献

- 赤尾勝己. 新しい生涯学習概論 後期近代社会に生きる私たちの学び. ミネルヴァ書房, 2012, 276p.
- アレント・ハンナ. エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告. 大久保和郎訳, みすず書房, 2017, 472p.
- 安藤史江. コア・テキスト 組織学習. 新世社, 2019, 264p.
- 磯直樹. 認識と反省性 ピエール・ブルデューの社会学的思考. 法政大学出版局, 2020, 438p.
- 井口一郎. マス・コミュニケーション どんなふう到大衆へはたらきかけるか その理論とその実証. 光文社, 1951, 257p.
- 今村仁司. アルチュセール 認識論的切断. 講談社, 1997, 353p.
- 稲葉振一郎. 「新自由主義」の妖怪 資本主義史論の試み. 亜紀書房, 2018, 376p.
- 稲葉三千男. マスコミの綜合理論. 創風社, 1987, 461p.
- 上山春平. 日本の思想 土着と欧化の系譜. 岩波書店, 1998, 335p.
- 上山春平. 弁証法の系譜 マルクス主義とプラグマティズム. こぶし書房, 2005, 302p.
- 内川芳美, 有山輝雄, 乾照夫他. 内川芳美氏に聞く = 回想・初期の新聞研究. メディア史研究. 2003, 15, p.147-170.
- 江藤淳. 実感主義は人間的か. 中央公論. 1957, 3, p.278-287.
- 江藤淳. 加藤秀俊の実感主義. 日本読書新聞, 1958.
- 大芦治. 心理学史. ナカニシヤ出版, 2016, 396p.
- 大井赤亥. ハロルド・ラスキの政治学 公共的知識人の政治参加とリベラリズムの再定義. 東京大学出版会, 2019, 312p.
- 海野道郎. 社会的ジレンマ 合理的選択理論による問題解決の試み. ミネルヴァ書房, 2021, 360p.
- オルソン・マンサー. 集合行為 公共財と集団理論. 依田博, 森脇俊雅訳, ミネルヴァ書房, 1996, 248p.
- オルテガ・イ・ガセット. 大衆の反逆. 佐々木孝訳, 岩波書店, 2020, 428p.
- 片山修. 山崎正和の遺言. 東洋経済新報社, 2021, 352p.
- 片山杜秀. 未完のファシズム 「持たざる国」日本の運命. 新潮社, 2012, 346p.
- 加藤秀治郎. 政治学 第3版. 芦書房, 2008, 343p.
- 加藤秀俊. 中間文化論. 中央公論. 1957, 72, 3, p.252-261.
- 加藤秀俊. 実感二つの文脈—江藤淳への返信. 日本読書新聞, 1958.
- 加藤秀俊. 整理学 忙しさからの解放. 中央公論社, 1963, 188p.
- 加藤秀俊. 取材学 探求の技法. 中央公論社, 1975, 184p.
- 加藤秀俊. 文化とコミュニケーション 増補改訂版. 思索社, 1977, 346p.
- 加藤秀俊. 加藤秀俊著作集第三巻 世相史. 中央公論社, 1981, 324p.
- 加藤秀俊. 独学のすすめ. 筑摩書房, 2009, 261p.
- 加藤秀俊. 九十歳のラブレター. 新潮社, 2021, 204p.
- 金森修. バシユラール 科学と詩. 講談社, 1996, 321p.
- 亀田達也. モラルの起源 実験社会科学からの問い. 岩波書店, 2017, 208p.
- カリエール. 外交談判法. 坂野正高訳, 1978, 228p.
- ガルブレイス, J.K. ゆたかな社会 決定版. 鈴木哲太郎訳, 岩波書店, 2006, 430p.
- 木下長宏. 中井正一: 新しい「美学」の試み, 1995, 263p.
- 久野収, 鶴見俊輔, 藤田省三. 戦後日本の思想. 岩波書店, 2010, 368p.
- 呉兢. 貞観政要 全訳注. 石見清裕訳注, 講談社, 2021, 776p.
- 後藤宏行. “6 総力戦理論の哲学: 田辺元・柳田謙十郎.” 共同研究 転向中. 東京, 平凡社, 1960, 273-338.
- 後藤嘉宏. 中井正一のメディア論. 学文社, 2005, 561p.
- 後藤嘉宏. 中井正一におけるメディアウム、ミッテル概念の関係性を再考するために 「脱出と回帰」(1951)



- 等の再検討と「メディアに支えられたミッテル」。  
図書館情報メディア研究, 2016, 14, 1, p.61-79.
- 後藤嘉宏. 中井正一「委員会の論理」(1936)における  
嘘言の媒介について. 情報メディア研究, 2018, 16  
(1), p.41-69.
- 後藤嘉宏. なぜ私は中井正一のメディア、ミッテル、  
二つの概念にこだわり続けているのか. 思想の科学  
研究会年報, 2019, 1, p.84-106.
- 後藤嘉宏. 三木清のパスカル、親鸞像と中井正一にお  
ける対話の論理の再構築. 思想の科学研究会年報,  
2021a, 2, p.110-106.
- 後藤嘉宏. 志明院から帰ってきて思ったこと. 思想の科  
学研究会年報, 2021b, 2, p.8-13.
- サトウタツヤ. 方法としての心理学史 心理学を語り直  
す. 新曜社, 2011, 214p.
- 佐藤俊樹. 社会は情報化の夢を見る [新世紀版] ノイマ  
ンの夢・近代の欲望. 河出書房新社, 2010, 354p.
- 佐藤信, 五味文彦, 高埜俊彦, 鳥海靖編. 詳説日本史研  
究. 山川出版社, 2017, 566p.
- サルトーリ・ジョヴァンニ. 現代政党学 政党システム  
論の分析枠組み. 早稲田大学出版部, 2009, 602p.
- 思想の科学研究会編. 共同研究 転向 中. 平凡社,  
1960, 492p.
- 清水幾太郎. 本はどう読むか. 講談社, 1972, 182p.
- 庄司武史. 清水幾太郎 経験、この人間的なるもの. ミ  
ネルヴァ書房, 2020, 432p.
- 杉山光信. 思想とその装置 1 戦後啓蒙と社会科学の思  
想. 新曜社, 1983, 233p.
- 盛山和夫. 協力の条件. 有斐閣, 2021, 388p.
- センゲ・ピーター・M. 学習する組織 システム思考で  
未来を創造する. 枝廣淳子, 小田理一郎, 中小路佳  
代子訳, 英治出版, 2011, 584p.
- 高橋禎子. 心の科学史 西洋心理学の背景と実験心理  
学の誕生. 講談社, 2016, 432p.
- 竹内郁郎. 戦後日本のマス・コミュニケーション理論の  
系譜. マス・コミュニケーション研究. 1998, 53.  
p.5-17.
- 竹内洋. 大衆モダニズムの夢の跡 彷徨する「教養」と  
大学. 新曜社, 2001, 292p.
- 竹内洋, 佐藤卓己, 稲垣恭子. 日本の論壇雑誌: 教養メ  
ディアの盛衰. 創元社, 2014, 350p.
- 竹内洋. 大衆の幻像. 中央公論新社, 2014, 321p.
- 竹内洋. 革新幻想の戦後史 上. 中央公論新社, 2015,  
369p.
- 竹内洋. 革新幻想の戦後史 下. 中央公論新社, 2015,  
377p.
- 竹内洋. 清水幾太郎の覇権と忘却 メディアと知識人.  
中央公論新社, 2018, 423p.
- 田村紀雄. 「新しい新聞学」の誕生と「マスコミ」論の影響.  
コミュニケーション科学. 2012, 35, p.123-133.
- 趙星銀. 「大衆」と「市民」の戦後思想 藤田省三と松  
下圭一. 岩波書店, 2017, 432p.
- 筒井清忠編. 日本の歴史社会学. 岩波書店, 1999,  
338p.
- 鶴見俊輔. 源流にいた人. 場, こぶし書房, 2003, 25,  
p.3-4.
- ドーキンス・リチャード. 利己的な遺伝子 40周年記念版.  
日高敏隆, 岸由二, 羽田節子, 垂水雄二訳, 紀伊國  
屋書店, 2018, 584p.
- 戸田山和久. 知識の哲学. 産業図書, 2002, 272p.
- 中井正一. 中井正一全集第1巻 哲学と美学の接点. 美  
術出版社, 1981a, 471p.
- 中井正一. 中井正一全集第2巻 転換期の美学的課題.  
美術出版社, 1965, 389p.
- 中井正一. 中井正一全集第3巻 現代芸術の空間. 美術  
出版社, 1964, 354p.
- 中井正一. 中井正一全集第4巻 文化と集団の論理. 美  
術出版社, 1981b, 375p.
- 中井正一. 中井正一評論集, 岩波書店, 1995, 406p.
- 中井正一. 美学入門, 中央公論社, 2010, 180p.
- 西垣通. 生命と機械をつなぐ知 基礎情報学入門. 高陵  
社書店, 2012, 213p.
- ニコルソン・ハロルド. 外交. 斎藤眞, 深谷満雄訳, 東  
京大学出版会, 1968, 273p.
- 沼上幹. 組織戦略の考え方 企業経営の健全性のために.  
筑摩書房, 2003, 221p.
- 野中郁次郎, 竹内弘高. 知識創造企業 新装版. 梅本勝  
博訳, 東洋経済新報社, 2020, p.
- 野中郁次郎, 戸部良一, 鎌田伸一, 寺本義也, 杉乃尾宜  
生, 村井友秀. 戦略の本質 戦史に学ぶ逆転のリー  
ダーシップ. 日本経済新聞出版, 2008, 496p.
- バーネイズ・エドワード. プロパガンダ [新版]. 中田  
安彦訳, 成甲書房, 2010, 240p.
- ハイエク・フリードリヒ. 隷従への道. 村井章子訳, 日  
経BP, 2016, 536p.
- 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 荻原滋. 認知心理学.  
有斐閣, 2010, 523p.
- 橋川文三, 加藤秀俊, 江藤淳, 田口富久治, 大江健三郎.  
『実感』をどう発展させるか. 中央公論. 1958, p.  
226-237.

- 長谷川寿一, 長谷川真理子. 進化と人間行動. 東京大学出版会, 2000, 291p.
- 原田隆之. サイコパスの真実. 筑摩書房, 2018, 254p.
- フェスティンガー・レオン. 認知的不協和の理論 社会心理学序説. 末永俊郎訳, 誠信書房, 1965, 277p.
- 古田博司. 旧約聖書の政治史 預言者たちの過酷なサバイバル. 春秋社, 2020, 376p.
- ベイトソン・グレゴリー. 精神の生態学. 佐藤良明訳, 新思索社, 2000, 706p.
- ベルクソン・アンリ. 時間と自由. 中村文郎訳, 岩波書店, 2001, 311p.
- ボードリヤール・ジャン. 消費社会の神話と構造 新装版. 今村仁司, 塚原史訳, 紀伊國屋書店, 2015, 368p.
- ポランニー・マイケル. 暗黙知の次元. 高橋勇夫訳, 筑摩書房, 2003, 194p.
- 本間伸一郎. ミッテルの夢はどこで見えるのか. 思想の科学研究会年報, 2021, 2, p.102-103.
- マイネッケ・フリードリヒ. 近代史における国家理性の理念Ⅰ. 岸田達也訳, 中央公論新社, 2016, 406p.
- マイネッケ・フリードリヒ. 近代史における国家理性の理念Ⅱ. 岸田達也訳, 中央公論新社, 2016, 183p.
- 松井勇起. メディア知識人を典型とする煽動行為者の範囲から見る人間類型—承認欲求と界の戦略との関係. 図書館情報メディア研究. 2018a, p.1-14.
- 松井勇起. 「先見の明」は科学的に解明できるか?. アレ. アレ★Club.5, 2018b, p.88-121.
- 松井勇起. 「時を動かす」ということについて 「<異なる>メカニズムとの直面」における「認知的不協和」の克服. アレ, 2020a, p.122-166.
- 松井勇起. 現代組織における「宦官」とは一三田村泰助『宦官』の組織論的再解釈. 八洲学園大学紀要. 2020b, 16, p.61-67.
- 松井勇起. メディア知識人論から見た加藤秀俊論 一実感論争における他人指向型社会への評価に焦点を当てて一. 情報メディア研究. 2020c, p.81-99.
- 松井勇起, 中尾優奈. 『空気』、そして『空気』の操作主体に対する社会科学的考察 富永恭次陸軍中将・東條英機陸軍大将間の組織内コミュニケーション行為分析より. 戦略研究, 27, 2020, p.25-48.
- 松尾睦. 職場が生きる人が育つ「経験学習」入門. ダイアモンド社, 2011, 224p.
- 松下圭一. 戦後政治の歴史と思想. 筑摩書房, 1994, 527p.
- 間々田孝夫. 消費社会論. 有斐閣, 2000, 285p.
- ミンツバーグ・ヘンリー, アルストランド・ブルース, ランペル・ジョセフ. 戦略サファリ 第2版 戦略マネジメント・コンプライト・ガイドブック. 齋藤嘉則訳, 東洋経済新報社, 2012, 488p.
- 毛沢東. 抗日遊撃戦争論. 藤田敬一, 吉田富夫, 小野信爾訳中央公論新社, 2014, 265p.
- 米盛裕二. アブダクション 仮説と発見の論理. 勁草書房, 2007, 260p.
- リースマン・デイビッド. 孤独な群衆 上. 加藤秀俊訳. みすず書房, 2013, 384p.
- リースマン・デイビッド. 孤独な群衆 下. 加藤秀俊訳. みすず書房, 2013, 336p.
- 柳田国男. 明治大正史 世相編. 中央公論新社, 2001, 438p.

(令和3年9月30日受付)

(令和4年1月12日採録)